

Tsukuba

COMMUNICATIONS

VOL.
26

筑波大学広報誌
ツクコム 2015

Winter

- 8 特集 世界遺産 file#2 白川郷合掌造り集落
- 10 聴 岩田洋夫 教授
- 12 OB&OG 山田修作 氏
- 14 学内組織紹介 外国語センター
- 16 名物先生登場 根本文雄 教諭(附属大塚特別支援学校)
- 18 Sports Club 漕艇部
- 20 Art & Culture つくば院生ネットワーク(TGN)
- 22 Homeland ネパール連邦民主共和国
- 24 TOPICS
- 30 リレーエッセイ
- 32 茗溪会・紫峰会
- 34 新聞掲載・テレビ放送一覧
- 35 イベントカレンダー



写真提供: 岐阜県白川村役場



セルジオ越後氏×ベントン・キャロライン

サッカー評論家・指導者

副学長

対談
グローバルに生きるということ



写真提供: O.TAKEDA



写真提供: メ〜テレ



対 談

グローバルに 生きるということ

サッカー評論家・指導者

副学長

セルジオ越後氏 × ベントン・キャロライン

日本のサッカー普及に尽力

ベントン:セルジオさんは、日系ブラジル人初のプロ選手としてブラジルのトップリーグで活躍した後、日本サッカーリーグ（Jリーグの前身）で活躍されました。まずは、日本に来たきっかけから教えてくださいませんか？

セルジオ:当時、日本サッカーリーグという企業スポーツがあり、日系ブラジル人選手を招いて戦力補強をするチームが増えてきていました。そんな流れの中で、藤和不動産（湘南ベルマーレの前身）から声が掛かりました。アマチュア

で、仕事の後にサッカーをやるという話でね。その頃僕は、ブラジルのプロサッカー選手を引退して、営業の仕事をしていましたし、日本語もわからないので、話を受けるかどうか悩みました。

ベントン:日本に来る決心をしたのは？

セルジオ:勤めていた会社の社長さんに相談したら、「違う国に行って、違う文化と触れ合って、言葉を覚える。それは留学で、普通、お金を払って行くものだよ。お給料をもらって海外留学ができるのに、何を迷っている。私は息子を海外に留学させたくてお金をためているのに、こんなチャンスを相談に来るなん

て。もしあなたが行かないなら、息子を紹介してほしい」と言われました。僕はそれまで、その話を留学と思っていなかったの。そう言われて「2年だけ行ってみよう」と日本に来て、42年になりました（笑）。

ベントン:日本になじんだんですね。私は、カリフォルニア大学デービス校3年生の時に、1年間交換留学生プログラムで日本に来ました。大学卒業後、再び日本に来て、働きながら筑波大学の大学院に入学しました。それから30年以上日本にいます。

セルジオ:だんだん日本に友達ができ



ていって、だんだん環境ができていて。逆に向こうに友達が少なくなっていくでしょう？

ベントン:そうですね。日本で過ごした年月の方がずっと長くなりました。どうしてサッカー選手を引退された後も日本に残られたのですか？

セルジオ:日本にサッカーを普及させたいと思ったからです。今では考えられないでしょうが、当時はスポーツ店に行っても、野球道具ばかりで、サッカー用品はほとんどなかった。日本に普及させるために必要なことは、「みんながサッカーで遊んで好きになること」だと思います

した。僕が生まれ育ったブラジルはサッカーが盛んなところで、赤ちゃんが言葉を覚えるようにサッカーを覚えます。誰かに教えてもらったという感じではなく、お兄ちゃんや年上の人、親とかと遊びながらね。ところが、日本でサッカーをやるといって、学校の体育の授業か部活動。そこには「サッカーを教える」という意識はあっても「サッカーで遊ぶ」という感覚はない。これは、学校で例えると、幼稚園や保育園に行かず、いきなり小学校6年生の授業を受けさせるようなものなのね。子どもは、滑り台やブランコで遊んで、楽しんで、幼稚園が好きになるもの。遊具が何もなかったら、なじまないでしょう。日本のサッカー環境にはこの大事な段階がなかった。しかも、小学6年生の授業をいきなりやったらできないのは当たり前なのに、できないと怒られるのね。

ベントン:それで、全国各地を回って、小学生対象のサッカー教室を開いたのですね。

セルジオ:「サッカーを教える」だけでなく、僕が子どもの頃にサッカーで遊んだように、子どもたちと一緒に遊んだり、ふざけ合ったりして、「サッカーの楽しさを伝える」ためのサッカー教室。どんどん褒めてね。子どもたちは「サッカーが面白い、面白い」と言って帰っていきました。楽しく遊んで、褒められると、サッカーが好きになります。日本では、サッカー指導という、選手を育てることばかりを考えて、選手になる以外の人の環境を考えていませんでした。でも、みんな選手にならなくてもいいんですよ。一部の上手になった子が、ちゃんと訓練されて選手になればいい。選手にならなくても、サッカーが好きになれば、サポーターとしてプロリーグを支える人になってくれます。スタンドには、サッカー選手になりたい子どもと、なれなかった大人が来るんです。

ベントン:サッカー教室はどのくらい開催したのですか？

セルジオ:20数年続けて、1000回以上開催しましたね。指導した子どもは60万人を超えます。多い時には、1回のサッカー教室に1800人が参加したこともありました。

ベントン:すごい数ですね。おかげで、

今では日本もサッカーがずいぶん盛んになりました。

セルジオ:「キャプテン翼」という漫画の大ヒットもあって、サッカーをやる子どもたちが急に増えたのも普及の大きな力になりました。そして、Jリーグが誕生して、子どもたちがプロになるという夢を持つようになって。今やって、世界レベルのサッカー環境が日本にできたという感じがしています。

宗教の違いによる スポーツ文化の違い

セルジオ:日本とブラジルでは、スポーツ文化が違います。それには、宗教の違いも関係があると思います。ブラジルはカトリックが主流です。ご存知のように、カトリックは、商店も全部日曜日はお休み。だから受け皿がスポーツになります。国民は、スポーツをエンジョイして週末を過ごすわけです。公園も開放しているし、スポーツクラブもたくさんある。誰でも、どこでも、いつでもスポーツができる環境。僕は子どもの頃から、サッカーだけでなく、バレーボールやバスケットボール、ハンドボールなど、いろいろな種目を同時に楽しみました。日本は仏教ですね。仏教は休まないで、ショッピングが週末の受け皿になっています。スポーツの場の中心は、学校の体育の授業と部活動です。

ベントン:日本の小、中、高生は、クラブに入ったら、その種目をメインにやりますね。

セルジオ:そこがブラジルとの大きな違いです。しかも学校の部活動は、中学3年生や高校3年生の夏を過ぎるとやめなければならない。これはスポーツ選手の強化・育成の面から考えたらとんでもないことです。小学5年生と6年生で一緒にチームにいても、翌年、小学6年生と中学1年生になると、一緒にできなくなるという問題もあります。外国では、ずっと一緒にできます。日本でも、学校外のスイミングスクールやクラブではできますが…。勉強がメインの学校という場でスポーツをするのには無理があると思うんですね。



セルジオ越後氏

サッカー評論家・指導者

1945年 ブラジル・サンパウロ生まれ
1964年 サンパウロの名門クラブ「コリンチャンス」とプロ契約
1969年 鉄鋼関係会社の社員
1972年 来日 日本サッカーリーグの藤和不動産サッカー部（湘南ベルマーレの前身）
1978年 （財）日本サッカー協会公認「さわやかサッカー教室」の認定指導員

グローバル化に必要なのは 何にでもチャレンジする意識

ベントン:ところで、セルジオさんは、私と同じように、多様な文化背景の中で過ごして来られました。筑波大学は、『地球規模課題の解決に向けた知の創造とこれを牽引するグローバル人材育成』というミッションを掲げています。そのために、日本人学生の国際化と外国人留学生の増加というポリシーを持っていますので、いろいろなことに取り組んできましたが、やはり多くの日本人学生はまだまだ内向きで、世界に目を向けてないようです。セルジオさんは、本当の意味のグローバル化とかグローバル人材について、どのように思いますか？

セルジオ:「なんでもチャレンジしよう」「できないもの、新しいものをやってみ

よう」という意識を持たないと、グローバル化できないと思います。受身ではグローバル化できません。グローバル人材になるためには、思い切って一歩踏み出すことです。僕もブラジルにいたら、受身の「こなし上手」になっていたと思うんですね。居心地が良く、友達がいる。でも、日本に来たから受身になれなかった。言葉もできない、右も左も分からない…それが自分のチャレンジする心を誘い出すのね。僕は、27歳で日本に来ました。言葉とか日本人より遅れた部分があるから、日本人と同じことをしていたら勝てません。だから、スポーツで覚えた闘争心で頑張りました。

ベントン:よく分かります。私も、大学卒業後、人生の中でさまざまなターニングポイントを経験しました。アメリカから日本に移住したことも、大学教員になる前、製

「思い切って留学すればなんとかなる。
人間はたくましいのよ」

造業やコンサルティング業界で働いたことも、大きなチャレンジでした。その度に大変な思いをしましたが、新しいことにチャレンジすることで、いろいろなことを学びました。自信も付きましたね。

セルジオ:日本からブラジルに行って成功した人の多くは、最初に日本人のいないところに住んだそうですよ。日本人に頼らず、現地に飛び込むと、そこからいろいろな可能性が出てくるということじゃないかな。

ベントン:今、留学する日本の若者が減っています。2004年には8万3000人弱でしたが、今では、3割減って5万7500人ほどになりました。

セルジオ:社会人も行きたくないと言っているのを聞きますね。昔、海外転勤は夢だったじゃないですか。今は、日本が豊かになって、居心地が良過ぎるのかもしれない。少子化で、親に大切に育てられて、海外でたくましくチャレンジしようという人が育たない。

ベントン:苦労しないで育ってきてますね。そういう学生こそ留学を経験してほしいと思いますが…。

セルジオ:留学は、自立するのに最高ですよ。心地良い家から出て、ゼロからスタートしなければならない。言葉や生活でぶつかる壁を一人で乗り越える。人間としてたくましくなり、一回り大きくなるのは間違いないですね。僕も日本に来ていろいろ困りましたが、今考えたら必要な体験でした。

ベントン:そうですね。私も大学時代の留学経験があってこそ、今ここにいます。留学を通じて、世界観が広がり、将来にいろんな可能性があることに目覚めました。また、楽しい経験でもありました。日本人の学生は、語学のバリアを感じているようです。私は、英語は単にツールであって、人間関係を作るには、最初から完璧に話す必要はないと思うんですけど。重要なのは、「自分の伝えたい気持ち」と、「人の言おうとしていることを聞こうとする気持ち」だと思います。

セルジオ:行く前に話せなくても、「勉強したい」という気持ちがあって、伝えなかったら面白くないという環境に追い

込まれたら、覚えますよ。覚えなかったらつまらないから。そりゃあ、初めはホームシックにかかりますよ。しゃべり出してやっと何とかなるの。人間、必要がなかったら、努力しないんです。

ベントン: 思い切って行けば、言葉はできるようになりますよね。

セルジオ: できる。絶対できる。人間はたくましいのよ。ただ、日本人の知り合いと一緒にいたり、留学先で日本人とばかりといったらダメですよ。

ベントン: お互いに頼ってしまうから。

セルジオ: 駐在している人も、すぐリトル東京を作ってしまう。そうすると覚えない。ホームステイがいいですね。そして、留学した人は、次の留学生のための情報人。次の人に、体験や経験を教えていく必要があるの。「こういうことを苦労しても、こうしたら成功したよ」とか、留学生の新鮮な情報を、直接次の人に伝える。うまく回転するようになったら、留学希望者も増えるんじゃないかな。

ベントン: 筑波大学には、留学経験者の会 (UTIC) があり、留学したことのない日本人学生あるいは、海外から来ている留学生対象のイベントをいろいろやってくれています。

セルジオ: それはいいですね。留学生でも、行った国によって体験が違う。そこもまた面白いね。

ベントン: 本当にそうですね。

セルジオ: 日本からの留学生が減っているのには、国の姿勢にも原因があるんじゃないかなと思います。ブラジルでサッカーのワールドカップを開催した時、日本の行政やテレビ局が「ブラジルは治安が悪いから行くな」と止めたんですね。僕がブラジルに行った時、「本当に日本はブラジルと付き合いたいのですか? 何で日本だけブラジルは危ないとおおるんですか? 総理がくるのに、何で国民は来られないんですか?」と知り合いの新聞記者に聞かれました。そして、「日本は2020年にオリンピックやるみたいね。なんか大地震が来るらしいね。危ないからみんな行くなとキャンペーンするか」と皮肉を言われました。問題が起こらないために、外務省が止めるのはいいんですよ。行かな

「英語は単にツールであって、最初から完璧に話す必要はないと思います」



ベントン・キャロライン

副学長

1984年	カリフォルニア大学デービス校 卒業
1994年	筑波大学大学院修士課程経営・経営政策科学研究科修了 MBA取得
1997年	東京工業大学大学院理工学研究科博士後期課程修了 Ph.D取得
2002年	英国国立ウェールズ大学経営大学院MBA (日本語) プログラム教授
2005年	早稲田大学客員教授
2008年	筑波大学大学院ビジネス科学研究科教授
2013年	筑波大学副学長

かったから問題は起きないんだから。でも、交流ってそういうものじゃないよね。「ここは危ない、あそこも危ない」と言われたら、この国から誰も出たなくなりますよね。日本は安全だから…。一方で日本に来る外国人観光客は大歓迎する。だけど、付き合いはギブ・アンド・テイクじゃないですか。そこから来る、行くというね。そして、行った先の人と友達になる。それが国際交流の始まりじゃないですか。

ベントン: ギブ・アンド・テイクがなければ、どの関係でも長続きしないですね。重要なのはお互い対等な立場からお互いのことを知ることです。その関係からいろいろな新しい発見をしますし、比較することで自分のこともよく分かってくると思います。

セルジオ: ブラジルに行った人は、「何にも危なくないじゃないか」って。「素晴

らしい国だった。食べ物おいしいし、みんな親切だったし、もう1回行ってみたい」と言います。日本に来た外国人も同じ気持ちを持って帰っていると思いますよ。

ベントン: そうですよ。

セルジオ: だからそういう国民同士の交流が平等であるかというところを、もう一回日本は確認すべきじゃないかなと思います。

新入社員に 新しいプロジェクトを

ベントン: 日本の企業についての話を少し聞かせてください。1990年のバブル崩壊後、日本の企業はグローバル・マーケットでは大変厳しい戦いにさらされていますが、今、日本の企業に必要なものはなんだと思いますか?

セルジオ: 僕が知っているいろいろな企業で、結構大きな会社が行き詰っている。みんな似ていますね。そういう会社では、新入社員が入ると、すぐに、先輩の社員がやっていた仕事を引き継がせます。新入社員は、その仕事をして、自分がやったと錯覚してしまう。でもこれは、35キロの地点から走って、マラソンをやった気になるようなもの。僕は社長さんに、「新入社員には、新しいプロジェクトにチャレンジさせなさい。それを成功させて、初めて会社の役に立つ社員になるんだよ。人がやったものを担当させても何の役にも立たないよ」って言うのね。新入社員に限らず、余裕がないから新しいものを作らない。そして、行き詰ってきているのね。

ベントン: 「自分で考えた新しいビジネスを作ってこい」と、若い頃にタイに行かされたという人にインタビューをしたことがあります。日本の食品会社の社員でね。若いという理由で周りの人は反対したけれど、ボスが行ってこいと言ったそうです。それで、いろいろ調査して、タイ人は甘いコーヒーが好きだということで、今までタイになかった缶コーヒーを売り出したんですよ。それが大成功して、今、タイで一番売れています。20代の人々がチャレンジして大成功した例ですね。「会社が自分にチャンスをくれたからできたこと」と言っていました。

セルジオ: 急成長していた時の日本は、結構そういうことをやっていました。ある程度大きくなったら、それをやらなくなってしまったのね。守りに入っちゃった。会社が始まった時と、会社の上に立つ人が入れ替わったからでしょうね。創業者にはチャレンジする大切さが分かるのね。途中から良さが消えていく。もったいないですね。

ベントン: 創業者はチャレンジャーですからね。

セルジオ: 新入社員は、とりあえず「昔からずっとある会社じゃなくて今年始まった会社」と思えばいい。ゼロからの出発。自分を追い込んでチャレンジすること。ただ、一服が必要なことも忘れちゃいけないんです。あまりにも追い込まれたら、長く続かない。あるいは、後遺症

があったら何も意味が無い。

ベントン: チャレンジを楽しまなきゃいけないんですね。

セルジオ: そうなんです。プレッシャーとか忙しさをエンジョイしなくちゃいけない。嫌々仕事をしたら、これは無理ですね。ある程度好きでないと。成功したり、得をしたりしなかったら、人間って生き生きしていられない。

優秀なベテランを キャンパスに

ベントン: チャレンジする心を持った学生を育てるために、大学は何をすればいいでしょう。

セルジオ: 日本は60歳過ぎたらもう年寄りと言われているのね。一番元気で、経験豊富で、教えられるものが多い方たちをね。こうした優秀なベテランを、所属していた企業活動の一環とし

て、週2回くらい、学生として大学のキャンパスに戻したらいいんじゃないかな。個人的なアイデアですけどね。若い学生と一緒に学びながら、優秀な若者を「自分のいた会社に来ないか」と勧誘する。成功した人たちは、若い人たちに、一番刺激のある話ができる人じゃないかなと思う。例えば、海外に駐在した人たちなんかの話はとても面白いんですよ。企業の役にも立つし、少子化に悩んでいる大学にもいいだろうしね。社会に貢献できる年齢の人たちが、退職後何もしないというのはもったいないことです。

学生のお手本になるような チャレンジングな生き方を

ベントン: 本学の教職員に一言お願いします。

セルジオ: 学生に「もっと交流して」「もっと



とチャレンジして」と指導するためには、まず自分たちからお手本を見せるべきじゃないかな。チャレンジすることはたくさんあります。日本の場合、例えば野球をやった人は、野球関係の仕事しか考えない。サッカーをやっていた人も、サッカー関係の仕事を求めるけれど、もっといろいろなことにチャレンジしたらいいと思う。例えば、僕は、アイスホッケーチーム「H.C. 栃木日光アイスバックス」※の経営のお手伝いをしているし、アンブティーサッカー※のスーパーバイザーもしている。新しいことを勉強し、いろいろな人と会うことで、自分の可能性が広がっていくと思うんですね。

ベントン: 違うスポーツにチャレンジするのに戸惑いはなかったんですか？

セルジオ: 僕がアイスホッケーチームの経営に関わるようになった時に、マスコミから「なんでアイスホッケーなんですか？あなたはサッカーでしょう」と聞かれました。野

球のキャンプやテニスを見に行ったりしても、必ず「どうして来たんですか？」と聞かれる。ブラジルでは、複数の種目をする習慣があるから、戸惑いがなかったんですね。だから、僕は、「みんなもう1種目のスポーツに興味を持って、もう1人友達を作ってみませんか？」というキャッチフレーズを作ったんですよ。1つの種目しかやらなかったら、その種目の友達しかできません。新しいスポーツにチャレンジすれば世界が広がりますよ。

ベントン: アイスホッケーチームの経営に関わるようになったきっかけは？

セルジオ: チームがなくなりそうだったからです。日本には廃部になる企業スポーツのチームがすごく多いです。僕の心を動かしたのは、「セルジオさんお願いします。このチームがなくなったらみんなが会えなくなる」という言葉です。これは大きな言葉ね。チームは人と人が会うきっかけのもと。憩いの場なのよ。それをね、

日本の企業は平気で廃部にしていくんですね。まあ、企業は社会のためにやっているわけではありませんから。けれども、みんなの憩いの場というのは、すごく社会のために貢献しているのです。スポーツの役割は人と人が会うためにある。日本は、そうしたスポーツの役割を意識していないのね。

キャンパスにしながら地球1周

ベントン: 最後に、本学の日本人学生と本学で勉強している外国人留学生に対してメッセージをお願いします。

セルジオ: 外国人留学生は日本にいたる間に、数え切れないくらいの人脈を作ることじゃないかな。学内だけじゃなくね。

ベントン: 今、筑波大学には、3200人ぐらいの外国人留学生がいます。ブラジルからの留学生は、南米の国の中でずば抜けて多く、44人います。

セルジオ: 筑波大生は、地球一周することと同じくらい恵まれている。だからそのことをもっと意識して、卒業するまでになるべくたくさんの外国人と親友になるべきですね。すごい財産になると思いますよ。

ベントン: 本当にそうだと思います。本日は長時間ありがとうございました。



▲ポルトガル語で
「365人友達ができたら、あなたの人生は成功します」の意

※【H.C. 栃木日光アイスバックス】日本初のプロアイスホッケークラブ。前身は日本最古（1925年創部）のアイスホッケーチーム「古河電工アイスホッケー部」。2014年12月開催の第82回全日本アイスホッケー選手権大会で、アイスバックス創部以来初の優勝を果たす

※【アンブティーサッカー】主に上肢（腕）下肢（脚）切断障害がある選手によるサッカーで、フィールドプレイヤーはつえを使ってプレーする



世界の文化遺産を守るための研究対象として、筑波大学は多くの世界遺産とのつながりがあります。文化財の価値や保存活動の一端を、現地でのフィールドワークの様子なども交えて紹介していきます。



写真提供: 岐阜県白川村役場

file #2

白川郷合掌造り集落

1995年、日本が世界遺産条約に批准した3年後、日本で6番目の世界遺産として登録されたのが「白川郷・五箇山の合掌造り集落」です。白川村役場基盤整備課の南昌和さん(大学院理工学研究科 1997年修了)と教育委員会事務局の松本継太さん、白川村の景観審議会委員として景観保全に携わる黒田乃生准教授(芸術系)に、お話を伺いました。

地元住民の「先見の明」

岐阜県白川村で合掌造り集落の保存活動が本格的に始まったのは1971年のことでした。それまで農業振興を進めてい

ましたが、合掌造りの文化的価値を生かした観光立村への大胆な方向転換が図られました。その

中心となったのは、合掌造り集落のある荻町地区の住民です。「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」が結成され、同時に「白川郷荻町集落の自然環境を守る住民憲章」が制定されました。合掌造り家屋の維持が難しくなり、解体や売却が行われる中で、住民自らが議論を重ね、合意を形成していったのです。

この住民憲章の柱は、合掌造り家屋を「売らない・貸さない・壊さない」の3原則。厳しいルールですが、集落を保存し、観光資源とするための必須条件として、現在まで堅持されてきました。他の建物についても、高さや色、屋根の角度など、集落の景観を損なわないためのガイドラインが定められています。このような活動が実り、1976年に「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、観光地としても認知度を高めていきました。

白川村は世界遺産登録のための直接的な活動をしていません。文化庁から打診を受けた時には、すでに登録の暫定リストに載っていました。白川郷の世界遺産登録は村の先人たちの努力と先見の明がもたらしてくれたもの。その精神は確実に若い世代へ受け継がれています。



◀ 松本継太さん(左)と南昌和さん

文化財の中で日々の暮らしを営む

展望台から眺める集落の風景は、「山奥の伝統的な農村」そのもの。この人口2000人に満たない小さな村に、国内外から年間百数十万人もの観光客が訪れます。集落に入るとまず、合掌造り家屋の壮大さ、迫力に驚かされます。



その一方で、そこでは人々の日々の暮らしが続いています。古き良き風習や景観を残しつつ、現代社会にも適合したコミュニティが成立している稀有な例です。自宅の一部を見学者に公開したり、民宿や食堂、土産物店を営みながら集落が維持されています。

集落の中で最も大きな家屋のひとつ「和田家」(国重要文化財)は、19世紀後期に建てられました。居住スペースの1階部分だけで110坪もの広さがあり、2・3階では養蚕が行われていました。ここで十数名が生活していたといいます。養蚕の空間を確保するために進化し、雪深い気候で育った木を使って建てられた合掌造りは白川郷の風土が生み出した建築で、これだけの年月を経てなお朽ちることなく残っています。



和田家



和田家当主 和田正人さん



屋根裏(3階)

典型的な過疎の村でしたが、多くの観光客が訪れるようになり、家屋を守り村を存続していくことができています。遺跡ではなく、現在進行中の生活と共存する文化財、それが白川郷の最大の魅力です。

守ること、変えること

合掌造り家屋の維持には、定期的なメンテナンスが欠かせません。費用の面では国の補助がありますが、技術や文化の継承も重要です。もともと集落には、住民が助け合って家屋を維

持していく仕組みがありました。特に屋根葺きには、集落の人々が総出で作業する「結」という伝統的な方式があります。「家」同士が労働力を貸し借りし、技術も継承するというコンセプト自体が集落の文化なのです。最近は業者に頼むケースが増えていますが、「結」の方式を残していくことも遺産保護の一部です。

観光地としてのブランドを確立した白川郷も、後継者がなく、空き家となってしまう家屋が出てきました。この地に住みたい人、観光ビジネスを興したい人がいても、「売らない・貸さない・壊さない」の3原則が空き家の有効活用を難しくしています。とはいえ、安易にこの原則を崩してしまうと、合掌造り家屋が投機の対象となり、適切な管理ができなくなる恐れがあります。保存活動の象徴でもある3原則をどこまで柔軟に運用するか、変えていく勇氣と知恵を出す時期に差しかかっています。

実は白川村は、たくさんの研究者が訪れる場所でもあります。明治期には、民俗学や社会学の分野で大家族制度が研究されていました。それが、合掌造りという建築様式へ関心が移り、現在では観光学の研究対象になっています。村では、こうした研究者とのコラボレーションも積極的に行い、景観保全や観光計画の策定に生かしています。

集落を盛りたてる価値の探索

合掌造り集落の周辺に広がる森林にも価値が詰まっています。かつては家屋の材料を切り出し、薪などの燃料を供給し、栃の実などの食糧も産みだした森。当時の生活の痕跡を示すものがたくさん残っている里山です。遊歩道を整備するなどして活用すれば、白川郷の魅力はさらに増すことでしょう。反面、過去に植えられた樹木が成長し、集落に影響を及ぼすようになっています。この森林も集落の景観をつくる大切な要素。どのように手入れをし、観光資源として役立てていくかがこれからの課題です。そのために、学生と村民によるワークショップなども行われています。

本学世界遺産専攻では、来年度、空き家となっている合掌造り家屋を1棟、試験的に借りることになっています。ここを拠点に、演習や遺産保護の研究プロジェクトを展開する予定です。来年は世界遺産登録20周年を迎える白川郷。世界遺産としての新たな価値の創出が期待されます。



黒田乃生准教授(前列左から2番目)と学生たち▶

の活動は、ここ10年ほどで「デバイスアート」として広く認知されるようになりました。

「歩く」こともバーチャルに

デバイスアート作品のひとつに「ロボットタイル」があります。このタイルの上で歩こうとすると、タイルは後方へ移動し、踏み出した足は別のタイルが受け止めます。歩く方向は自在。足の位置を検知して、タイルがその方向に先回りしてくれるのです。歩いている本人は普通に前進していますが、実際には足踏みで飛び石を渡っているような動きになります。タイルは上下にも動くので、階段やぬかるみなどの歩行感覚を表現することも可能です。



歩くという動作を組み込むと、バーチャルリアリティの応用範囲は格段に広がります。例えば災害時の避難シミュレーター。ある場所で火災が起った時の映像を直径1・5メートルほどの特製球面ディスプレイに投影し、それを球体の内側から眺めると、あたかも火災現場にいるように感じます。さらに自

ら周囲の状況を把握し、逃げ道を探して歩くことで、障害物を回避したり疲労を感じるなど、地図上で経路をたどるよりもはるかにリアルな避難体験が得られます。

巨大ロボで世界観を変える

バーチャル世界をつくり出す最先端の装置は、時に無骨なまでの機械的な姿をしています。特に歩行感覚を正確に再現するためには、複雑な機械の組み合わせや微妙な調整が欠かせません。設計段階から試行錯誤の繰り返しです。それができる研究室は、ここを含めて世界で3カ所だけ。バーチャルリアリティの研究にはものづくりの技と情熱も要求されるのです。

現在製作中の巨大ロボット。高さ5メートルの人型に近いものです。プログラムリーダーを務める「エンパワーメント情報学プログラム」で計画している新しいエンパワースタジオに導入される予定で、もちろん操縦可能です。ロボットの操縦というと、コックピットに座って操縦かんを握るイメージがありますが、この装置は自分の足で歩き、その歩行感覚が拡張されます。巨大ロボットの動作や感覚を自分のものとして捉える、そんな体験をしたら世界観が一変するはずです。それによって、アイデアや思想を表現する力や、分野を横断して協働する力を身につける、新しい人材育成を実現しようとしています。バーチャルリアリティは人と工学システムとのインタラクション。その表現形態としてのデバイスアートを通して、リアルな研究・教育、そしてコミュニケーションの可能性を広げていきます。



いわ た ひろ お 岩田 洋夫 教授(システム情報系)

1957年 東京都生まれ
1981年 東京大学工学部機械工学科 卒業
1986年 大学院工学系研究科修了(工学博士)
筑波大学構造工学系助手
2002年 機能工学系教授

バーチャルリアリティ、特にハプティックインタフェース、ロコモーションインタフェース、没入ディスプレイの研究に従事。SIGGRAPHのEmerging Technologiesに1994年より14年間続けて入選。Prix Ars Electronica 1996と2001においてインタラクティブアート部門honorary mentions受賞。1998年 東京テクノフォーラム・ゴールドメダル賞受賞。2001年 文化庁メディア芸術祭優秀賞受賞。2011年 文部科学大臣表彰 科学技術書 受賞

聴

岩田 洋夫 教授（システム情報系）

実在しない世界を実感する

人と工学システムの絶妙なインタラクション

五感の中でも触覚には、温度や質感など皮膚の表面で感じるものだけでなく、重さや硬さなど筋肉で捉える「手ごたえ」の感覚（体性感覚）があります。これは、行動に対する応答、つまり人と世界とのインタラクションから生まれる、重要な感覚です。体性感覚をよりリアルに再現し、あたかもそこに「モノ」があるという感覚、それを思い通りに動かしているという実感の得られるバーチャル世界をつくる、それがバーチャルリアリティー学です。

行動と感覚がマッチする

最近の3D映画はとでもリアルな映像を提供しますが、観客が手を伸ばしても触れるものはありません。押す力に応じて扉が開く、踏み込む力から地面の凹凸が分かる、そういう感覚は、自分の行動を実感するためには不可欠なものです。単に実在しない世界を実在するように見せるだけでなく、その中で行動した時に適切な手ごたえを感じられるというのが、バーチャルリアリティーの神髄です。周囲の世界が全く架空の映像だとしても、そこでの行動とそれに伴うはずの体性感覚が整合していれば、その世界は十分に「あり得る」ものになります。

この技術の応用として期待されているのが外科手術のシミュレーターです。附属病院の消化器外科グループと共同で、手術器具を操作したり臓器を取り出す感覚を再現するシステムを開発しています。外科医の養成には時間がかかる上に、患者を練習台にはできませんから、効率的にトレーニングをするために、バーチャルリアリティーは最適な技術といえるでしょう。このような研究を始めたのは1980年代後半のこと。まだ「バーチャルリアリティー」という言葉もなかった時代です。成果を発表しようにも、「触感」は論文やポスターではなかなか伝わりません。そこで考えたのが「実演」という発表形態でした。装

置を体験できる「対話セッション」を、学会に初めて設けたのです。今では一般的ですが、当時は画期的な発表スタイルでした。

デバイスアートの世界を開く

それでも学会は閉じた世界です。成果を世の中に出してみたいという思いが募りました。1996年、オーストリアで開催される「アルスエレクトロニカ」というメディアアート芸術祭のインタラクティブアート部門に装置を出品したところ、見事に入賞し、一般来場者に実機を体験してもらう機会を得ました。学会とは規模も対象者も大違い。人々の反応もまるで異なるものでした。



その時の作品は「Cross-active system」というもの。2人の参加者の一方の手ひらの上で、もう一方の人が弄ばれるような感覚を味わう装置です。両者の関係性によって、そこにはさまざまなコミュニケーションが生まれます。アートという意識はありませんでしたが、そういう新しいコミュニケーションのアイデアも含めて、工学システムがアートとしても評価されたわけです。

工学の枠組みを越えたことで、研究者同士の議論では見えなかった課題やニーズが見えられ、それが次の研究へとつながりました。これまでに、20点以上に及ぶ「体験できる研究成果」を国内外で展示し、工学と芸術が融合したこの領域をけん引しています。そ

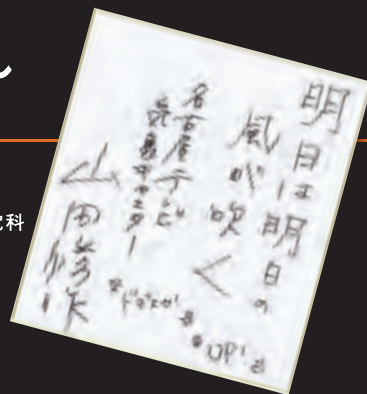
爽やかな笑顔とわかりやすい解説で人気の気象キャスター山田修作さん。今回は、環境科学研究科を修了し、名古屋テレビ放送の朝の情報番組「ドデスカ!」、夕方の報道番組「UP!」のレギュラー出演者としてご活躍中の山田さんにお話を伺いました。

やま だ しゅう さく

山田修作さん

気象予報士／気象キャスター

1976年 愛媛県生まれ
2000年 東北大学 理学部卒業
2002年 筑波大学大学院 環境科学研究科
環境科学専攻 修士課程修了
2002年 南日本放送 入社
2003年 気象予報士 取得
2005年 フリーアナウンサー
2005年 テレビ朝日
2006年 名古屋テレビ放送



— まずは、東北大学を卒業後、本学の環境科学研究科に進学された理由から教えてください。

東北大学では、理学部地理学科で気候学を専攻し、気候変動や地球温暖化に関することを研究していました。筑波大学の大学院に進んだ理由はいくつかありますが、教授陣が魅力的だったことも大きいです。現在、総合地球環境学研究所長をされている安成哲三先生など、研究したい分野の有名な先生がいらっしゃいました。

— アナウンサーになろうと考えたのはいつですか？

小学生の時から、「アナウンサーになりたい」という漠然とした夢はあったのですが、「テレビに出る人なんて自分とは別世界」と思い込んでいました。ところが、大学院に進学が決まった頃、高校の同級生がアナウンサーに内定したという話を耳にし、「アナウンサーはそんな遠い世界じゃないんだな、目指してみよう」と考えるようになりました。それから、アナウンサーになるにはどうしなければいけないかを調べ始め、筑波大学に入学すると同時に、東京のアナウンス学校に通うことにしました。せっかく天気の勉強をしているのだから、気象予報士の資格を持っていた方がアナウンサーになる上でプラスになると考えて、気象予報士の勉強も始めました。結局、気象予報士の試験に合格したのは就職した後でしたが…。

— とても忙しかったでしょうね。

大学院は、入るとすぐに就職活動の

時期になってしまうので、大学の授業、研究、就職活動、アナウンス学校、バイトと忙しかったです。でも、研究科の仲間と旅行に行ったり、飲みに行ったり、楽しんでいましたよ。必修の体育の先生が、授業と関係なく、伊豆でのシュノーケリングツアーを企画してくれたことや、アンコウ鍋を食べに連れて行ってくれたこともありました。僕はそういうことに参加するのが大好きなので、いろんなところに顔を出していました。今でもこの頃の仲間と深く付き合っていますし、本当に充実した2年間でした。

— 就職活動はいかがでしたか？

東京の局から大阪、名古屋と、全国各地のテレビ局を受け、35局目で、鹿児島県の南日本放送の内定をもらいました。大学院2年の6月に決まったので、比較的早い時期には決まった方かもしれません。2年越しで受けている人や、100社くらい受けたという人もいましたから。

— 誌面でお伝えできないのが残念ですが、声がとても素敵ですね。

ありがとうございます。アナウンサーになるきっかけになったわけではありませんが、みんなの前で発表した時などに、「声がいい」というのは、昔からよく言われていました。アナウンス学校などでボイストレーニングもしましたが、「生まれつきのものもあるのかな」と親に感謝しています。

— 南日本放送に入られていかがでしたか？

鹿児島は毎年のように台風が直撃するところですし、会社のビルも過去に水害にあったことがあり、気象にとっても力を入

れていました。入社してから気象予報士の試験を受けることに関しても協力的で、ありがたかったです。ここでは、ニュースを読んだり、情報番組のMCをしたり、スポーツ実況したりするのが主な仕事でしたが、気象予報士の資格を取った後は、気象キャスター的な仕事も少しやっていました。

— フリーになられたきっかけは？

南日本放送が嫌だったわけではないのですが、「若いうちにもっといろいろなところを見てみたい」と思って、丸3年やってフリーになり、東京に出て行きました。次の仕事を見つけてから辞める人が多いのですが、僕はとりあえず辞めちゃって(笑)。半年間は何も仕事がありませんでした。

— 不安になりませんでしたか？

なりませんでした(笑)。楽観主義というか、「なんとかなる」という変な自信があるんです。仕事がない間、前に行っていたアナウンス学校に通っていました。いい切り替えの期間だったと思います。半年後、テレビ朝日のウェザーセンターで働けるようになったのですが、ここでのお仕事は、情報番組のお天気キャスターが読む原稿を書くのが主で、大雪があったり、台風が来たりしたら、番組にちょっと出演するというものでした。僕は、自分でしゃべって伝える仕事がしたかったので、しばらくして、系列の名古屋テレビ放送でお天気キャスターのオーディションがあった時に応募しました。

— それが夕方の報道番組「UP!」ですね。現在は、朝の情報番組「ドデスカ!」にもレギュラーで出演されていますが…。

朝と夕方の番組に出るようになって4年目に入りました。朝4時過ぎに起きて5時に局に入り、天気の情報を見たりして準備をし、7時頃から「ドデスカ!」に出演します。番組が8時に終わり、反省会をして、9時頃から朝食。10時から13時まで休憩時間。この間に、30分くらい会社周辺をランニングし、1時間半くらい会社の仮眠室で仮眠します。13時から夕方の

番組の準備を始め、18時15分から19時までの「UP!」が終わると反省会をし、一日が終わります。最初はこんな生活を続けていけるのか不安でしたが、やってみると慣れるものです。ちょっとくらい体調を崩すと局の人も気を遣ってくれるかなと思うんですけど、全く崩しません(笑)。

— 多忙なスケジュールの合間に、ランニングを日課にされているとは驚きです。トライアスロンに挑戦する様子が「UP!」で放送され、「アイアンマン」と紹介されたこともあったそうですね。

マラソンは、名古屋に来てから始めました。会社にいる時間が長いので、ランニングはいいリフレッシュになります。水泳は趣味で昔からやっていて、マラソンを始めたので、あとは自転車を買えばトライアスロンを始められると思って、トライアスロンもやるようになりました。トライアスロンのレースには年に2回くらい出場しています。マラソンは、ちょっとした仲間同士の駅伝大会みたいなまで含めると、5、6回出場しています。

— 番組に出演する上で心掛けていることはありますか？

朝は情報番組、夕方は報道番組なので、朝の方がくれた僕を出しています。天気予報はどの局も、契約している天気の会社から送られてきた情報に、気象予報士が味付けして伝えています。僕はな

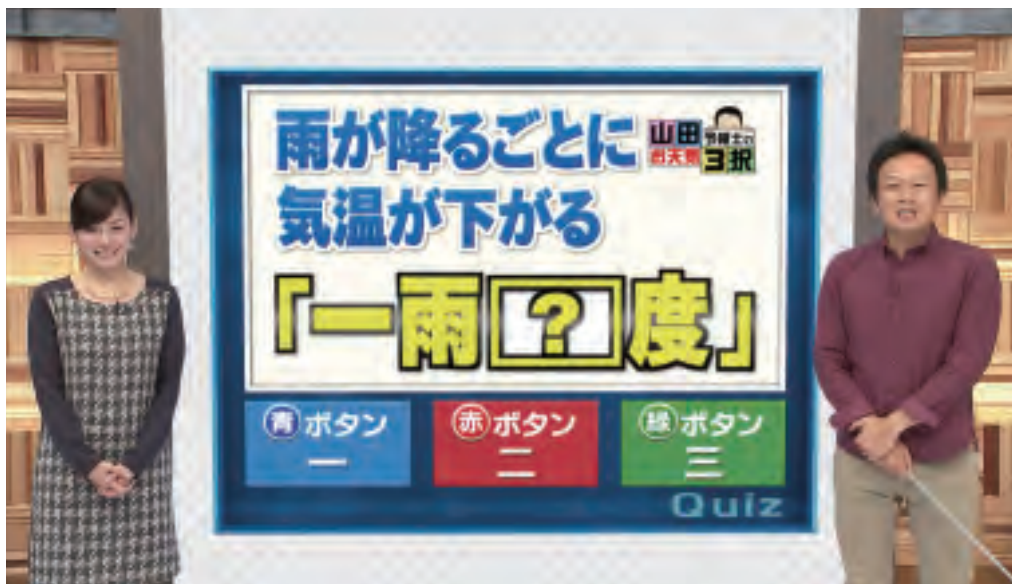
るべく専門用語を使わず、中学生でも分かるように伝えようと心掛けています。

— 今どんなことに関心がありますか？

最近の、あまりにもあおり過ぎるような気象の報道が気になっています。例えば、10月に台風が2つくらい来ましたが、来る前から「過去最大級の台風」というような文言をつけていました。そこまでは言い過ぎで、来てみると大したことはありませんでした。それはそれでいい部分がありますが、あおり報道をし過ぎると狼少年になってしまいます。テレビは刺激的に報道しようとする傾向がありますが、大事なのは正しい情報。だから、僕らは自分の中にちゃんと芯を持って、周囲に流されず、正しい方向に持っていきたいという思いがすごくあります。

— 最後に、学生にメッセージをお願いします。

大学院時代、ファミリーレストランで、一番仲が良かった友達と、よく5時間も6時間も話をしていました。この時に「君ってこういうところがあるよね」と言い合ったことが、就職活動する時の自己分析にとっても役立ちました。自分のことって、自分だけで考えても分からないでしょう。友達だけでなく、先生とかいろんな人と接して、たくさんしゃべる。興味を持ったものには、積極的に飛び込んでいく。そういうことがとても大事だと思います。



写真提供:メ〜テレ

外国語センター

Foreign Language Center

Introduce

どんな分野においても、外国語は世界で活躍するために不可欠なツールです。日常会話も含め、学術やビジネスの国際舞台で通用する、生きた外国語を習得することは、大学における基本的な教養教育の一つ。外国語センターでは、グローバル化の流れの中で、ますます高まる外国語教育に対するニーズに応えるべく、質の高いカリキュラムや学びの場を提供しています。



浜名 恵美 センター長

「使える」言語を身につける

ひと言に「外国語を話す」といっても、挨拶や世間話のような何気ない会話から、プレゼンテーションや交渉などの重要な議論まで、さまざまなレベルがあります。そしてそれらは別々にあるのではなく、全部を含めて人間関係やコミュニケーションを成立させます。真に「使える」言語とは、その場や相手に応じた会話や表現ができるということなのです。筑波大学では、開学当初よりそういう実用的な言語を身につける教育を目指してきました。

そのために外国語センターでは、読む・書く・聞く・話す、の4技能を重視し、考える力・気づく力・使える力の3本柱に沿ったカリキュラムを編成しています。特にここ4年間は、さまざまな学術分野での研究活動や成果発信を意識した内容に改変し、研究大学としての実用英語教育に注力してきました。また、新たに導入したCALL (Computer-Assisted Language Learning) システムによる、

マルチメディア教材などを活用した総合的な授業にも取り組んでいます。

言語から文化を知る

グローバル化というと、まず思い浮かぶのは英語でしょう。確かに英語は世界共通語の一つですが、外国語センターでは、英語の他に、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語、朝鮮語、アラビア語を学ぶことができます。どの言語にも、ネイティブあるいはそれに相当する教員がおり、英語と同様に実用的な語学教育を提供しています。

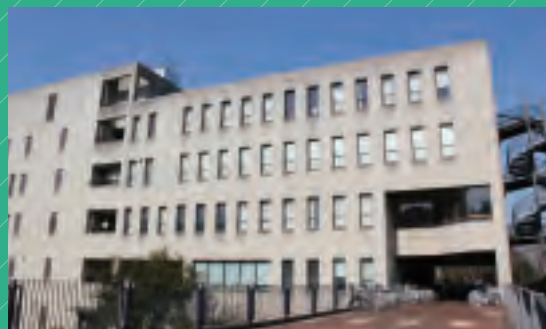
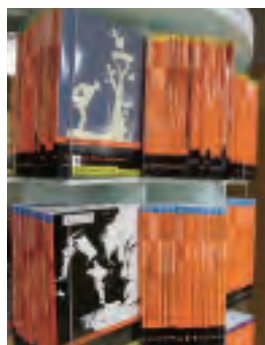
言語はコミュニケーションのツールであると同時に、多様な文化を理解するための足掛かり、さらには自国の文化を知ることにもつながります。これも国際人として活躍するためには重要なこと。単語の意味や文法を覚えるだけでは、相手の意図も自分の考えも正しく伝わりません。外国語を学ぶことは、その背景にある歴史や習慣などを理解し、複眼的な

視点を醸成する機会でもあります。この点でも、ネイティブの教員がいる意義は大きいでしょう。

外国語を習得すれば、日本の文化や習慣について外国人に説明を求められる場面にもしばしば遭遇します。伝統文化や歴史からサブカルチャーまで、日本語でさえ説明が難しいこともありますが、日本の文化について発信できるようになることも、外国語教育の重要な側面です。

生きた交流の場

筑波大学には世界中からやってきた約3000人の留学生がいます。ですから、キャンパス自体が国際交流の場でもあるわけです。しかしながら現実には、留学生が外国語の授業に出席することは少なく、学群・学類生の場合は特に、留学生と日本人学生が出会う機会はほとんどありません。外国語センターでは、留学生も参加できる授業を開設し、それを



通じて言語や文化の相互理解につなげようとしています。

日本人の中には、普段はおしゃべりな人でも、外国語になると無口になってしまふ人が少なくありません。正しい文法で流暢に話さなくてはいけないという意識があるためです。また日本では、相手の話は最後まで聞くというようなマナーがありますが、国によっては、積極的に発言する姿勢の方が好印象を与えるなど、コミュニケーションをする上での作法も異なります。

けれども実際に外国人と話をしてみると、例えば、英語でも訛りがあったり、教科書の文法と違うこともしばしば。気軽に交流できる場があれば、外国語に対する心理的な壁を取り払うことにもなるのです。「筑波大学にいながらにして海外留学をしているような環境を作り、小規模なキャンパスインキャンパスを実現したい」と、浜名恵美外国語センター長は将来構想を語ります。

世界共通語としての英語

外国語教育は、英語だけを学べばよいというわけではありませんが、研究大学として世界で認知・評価されていくことを考えると、必然的に英語に対するニーズは高まります。特にアカデミックな分野で使える英語力が求められており、学類によっては、英語で行う授業や専門性に特化した英語の指導が行われています。そこで、外国語センターでも、学類2年生を対象に、専門英語でのプレゼンテーション、小論文執筆、科学英語などのカリキュラムを増やして、こういった要請に対応しています。

研究成果を発信するためのツールとしての英語は、歴史、文学や日本語の研究などの文系分野でも威力を発揮します。日本人にしか分からないような領域こそ、英語で発信すれば、世界中にその素晴らしさを伝えることができますし、引用される可能性もあるのです。

また、ビジネスや外交においては、国際交渉力も問われます。高度な英語能

力に加え、どんな場面でも萎縮せずに自分の考えを主張しつつ相手との対話を成立させる、そういう姿勢も身につける外国語教育は、筑波大学の特徴です。

さらに実践的な外国語教育へ

筑波大学は、来年度、さらなる進化に向けた改組を行う予定です。外国語センター、留学生に対する日本語教育を担ってきた留学生センターの日本語教育部門、そして国語教育等を統合し、グローバルコミュニケーション教育センターとして、コミュニケーション能力を重視した語学教育の新拠点を構築する計画です。新たな外国語教育部門では、外国語教育に専念する教員を増やし、実践的な外国語教育を行う体制を整えていきます。「基礎から応用まで、すべてのレベルで研究大学として必要な外国語教育を提供したい。スーパーグローバル大学にふさわしいセンターの外国語教育部門を目指します」(浜名センター長)

附属学校の 名物先生登場！ 16

本学には、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県に11校の附属学校があり、いずれもそれぞれの分野でわが国の教育をリードしています。そこには、全国でも有名な先生たちが大勢います。このコーナーでは、各学校の名物先生を順次紹介しています。



今回の先生

Profile

ね もと ふみ お
根本 文雄 教諭
筑波大学附属大塚特別支援学校

1981年 千葉県立市原緑高校卒
1986年 東洋大学二部文学部教育学科卒業
杉並区立済美養護学校幼児教室
非常勤講師
1991年より現職。幼稚部、中学部教諭を経て、
2011年中学部主事、2012年より高等部主事。
障害児基礎教育研究会 幹事
日本特殊教育学会 会員

根本先生の一日は、朝からフル回転だ。その日の教員配置を確認し、生徒の健康状態や家庭での様子などの情報をキャッチし、それに応じたケアも欠かさない。額に巻いた手ぬぐいで気合を入れる。

高等部の1年生2人との自立活動の授業。さまざまな教材を使って、形・方向・順序・数などを認識するトレーニングを繰り返す。「リベット」という小さなピンを形に沿って穴に差ししていくものや、図形のパズルなど、簡単そうに見えるが、実際にやってみると意外とてこずる作業

だ。うまくできればハイタッチで褒め、手間取っていれば手を添えたりヒントを与えたりして根気よく見守る。

これらの教材は全て根本先生の手作り。この教材開発が根本先生の専門であり、教育者としての原点でもある。教材に取り組む様子を通して、それぞれの生徒の得意なことや苦手なこと、行動の特徴などを知ることができる。教材は、言葉での意思表示が十分にできない生徒たちとの、大切なコミュニケーションの手段なのだ。

学校の一画には、使い込まれた新旧

の教材がずらりと展示されている。ボールやひもなど、身近にあるものを使って簡単に作れるものから、加工や配線などの技術を要するもの、さらには芸術作品と見紛うばかりの一点ものまで幅広い。木材、金属、プラスチック、素材も多様だ。教材を使った特別支援教育は、日本では戦後から導入されるようになったが、専用品として市販されているものはほとんどない。障害の内容や程度に応じた工夫を施して初めて、教材はその力を発揮するのだ。そこに並んでいるどの教材にも、試行錯誤の跡がうかがえる。



根本先生は、体育の授業では生徒たちと一緒にマラソンを走り、作業学習では本格的な陶芸の手ほどきもする。ここでは教員全員がチームとして、担当教科を越えて生活や学習全般の指導にあたる。大変だが、それが教育の醍醐味でもある。障害の有無にかかわらず、教育で最も重要なのは環境。そして教員自身は何よりの教育環境だ。そう考えるからこそ、自ら率先して何でもやる。小まめに生徒たちに声をかけ、じっくり話を聞く。保護者や教員仲間とも丁寧にコミュニケーションを図る。実はそのきっかけも教材がくれた。

学生時代は野球や柔道に打ち込んだ「体育会系」。話を聞くより先に体が動くタイプで、生徒たちに対しても最初は叱咤するばかりだった。しかし教材は工夫次第でどんな生徒でも「できる」ようになるものだ。できない生徒がいたとしたら、それは自分の工夫が足りないから。教材教育に携わるうち、そんなふうに変え方が変わっていった。ゆっくりと時間をかけ、手を差し伸べ、褒める。「できる」「褒められる」という経験は、生徒にも教員にも自信を与える。主客転倒、生徒から学ぶことは無限にある。

この姿勢は他の教員にも波及している。指導の基準や生徒一人一人の課題について、日常的に議論し、アイデアを出し合う。教材教育の効果も科学的



に分析して共有する。それが、生徒たちへの目配りにもなり、ストレスのない学校づくりにつながる。一教員として現場での教育に専念したい気持ちは強いが、自分の経験やノウハウを後進に伝えること、高等部全体を円滑に運営する頼れる存在であることも、根本先生の大きな使命だ。

教材教育との出会いは、最初に出任した幼児教室。ちっとも言うことを聞いてくれなかった子どもが、教材には落ち着いて向き合っている。その姿を目の当たりにして以来、教材のとりこだ。そして、今も師と仰ぐ良き先輩教員と巡り合えたことが、大きな心の支えになった。生徒たちにもそんな目標になる人に出会ってほしいという根本先生の願いは、オリンピック教育に活かされている。

筑波大出身のメダリストと交流し、彼らも同じように悩み、学んで、活躍していると知るとは、生徒たちの自信と生きる力を育む。

特別支援教育の基本とされてきた「生きる力」は、今や教育全体の目標に掲げられてい

る。特別支援学校は閉じた世界のように思われがちだが、そこで培われてきた学びのサポートや教材教育は、普通学校はもちろん、病気やケガからのリハビリや高齢者の機能訓練などへの応用も可能だ。誰にでも分かりやすいユニバーサルな教育方法として花を咲かせようとしている。

もともと教材開発は、教員個人の自主的な取り組みだった。今でこそ、予算や作業場が確保されているものの、根本先生も初めは地道に材料をそろえ、図面を引き、見よう見まねで加工技術を身につけた。その中で、協力や相談のできる仲間に出会い、勉強会を立ち上げた。やがて後輩たちも加わり、ノウハウや実践経験の蓄積と共有のネットワークを広げている。全国の特別支援教員に向けた講座も毎年開催する。手作りのものから最先端の機器まで、あらゆる教材を紹介し、障害者の能力を最大限に引き出せるように、教員や保護者を支援するセンターをつくるのが夢だ。

「可能性を諦めず、できることを確認しながら一歩ずつ進んでいく」そう語る姿は、生徒たちの成長を願う愛情いっぱいの応援団だ。



高橋幸子 副校長

根本先生は、本校の「教材センター」のような存在です。教員の相談に「因果関係の理解」ならこれ、「目と手の協応」ならこれ、「始点と終点の理解」ならこれ、と即座に教材を提供しアドバイスしてくれます。そこには子どもが「今、何に困っているのか」「何につまずいているのか」「どう見えているのか」、丁寧に見つめ、本人に寄り添う温かいまなざしがあります。

夏休みには教材教具作りの公開講座を開設したり、たくさんの教材をワゴン車に積んで施設訪問をしたりして、教材教具の持つ意義を発信しています。教材の魅力と教材作りの醍醐味を味わった「根本ファン」が日本全国に散らばっています。そのつながりは根本先生だけでなく大塚の財産でもあってと思っています。

インカレ優勝！
アジアジュニア選手権優勝！

世界ステージへ向けて始動！

鋭い流線型のボートが川面を滑るように走る。巧みなオールさばきは水しぶきを上げず、すぐそばでカモが何事もないかのように戯れている。良く晴れたその日、戸田ボート場では日本代表候補選考トライアルが行われた。

男子6人女子9人の漕艇部から出場したのは3人。U20枠ですでに代表に認定されていた小原有賀選手(体育専門学群1年)に加え、越智寛太主将(体育専門学群3年)、木村光里選手(体育専門学群2年)がU23枠で見事通過。今年7月にブルガリア プロヴディフで開催されるU23世界選手権出場へ大きな一歩を踏み出した。

越智主将は、2歳年上の兄の影響でボートを始め、本学に進学したという。一昨年の日本大学選手権大会(インカレ)ではその兄、越智元太現ヘッドコーチ(人間総合科学研究科 体育科学専攻1年)と組んで男子ダブルスカル※準優勝。本年度は、内藤草太選手(前主将 情報科学類4年)と組んで、同種目50年ぶりの優勝を果たした。「前年度の雪辱を果たさそうという気持ちはあまりなかった。こうじゃないと絶対嫌だという自分の理想の感覚があって、ただ、その感覚に持っていくことに必死

だった」とインカレを振り返る。

「ボートは感覚のスポーツなので、イメージできているかどうかは重要なこと。ただ、なかなかイメージと動きが擦り合わない。たとえスピードが出ていても、選手自身は感覚として違うと悩んでいることもある」と越智ヘッドコーチ。ボート未経験者には分かりようのない「感覚」だが、早さを競う単純なルールで、動きもシンプルに見えるボート競技の「奥深さ」が伝わってくる。

小原選手は、「悩んで悩んで悩んでやっている、いきなり、自分どうしたんだろというくらいスピードが出るようになる、ということがたまに訪れる。その喜びを味わうと、また頑張れる」と、ボート競技の魅力を語ってくれた。

その小原選手が本学に進学したのは、同じ愛媛県出身で、高校時代から後を追っていた先輩でありライバルでもあった木村選手(前主将)の存在が大きい。10月の第55回全日本新人選手権大会では、木村選手と組んで女子ダブルスカルで優勝し、「夢が叶って嬉しかった」と満面の笑み。小原選手は、インカレ・女子シングルスカルで3位入賞。日本代表として、2014アジアジュニア選手権大会に出場し、女子ダブルスカルで優勝した、日本のホープだ。

本学漕艇部は、日本で一番古い歴史を持ち※、たくさんのOBが強力にバックアップしてくれているが、伝統による重圧はない。「うちの雰囲気は特殊。こんなに柔らかい部はない」と岡山大学漕艇部出身の田邊良祐テクニカルコーチ(人間総合科学研究科 教育基礎学専攻2年)が言えば、「学年に関係なく、楽しくわいわいやっていて、部というより仲良しクラブという感じ」と内藤前主将。しかし、それは部員一人一人が自分に厳しくできるからこそ。自分で決めた目標に対して、自分自身で頑張るというのが基本スタンスだ。その目標を達成するために必要な練習メニューをアドバイスするのが越智ヘッドコーチ。大学院で学んだことをどんどん取り入れ、科学的トレーニングを指導している。今シーズンに取り入れたのは、短時間・高強度のインターバルトレーニング。他の強豪大学の1/3～1/2の練習時間で結果を出しているのは、他大学がまだ取り入れていない最先端のトレーニングによるところも大きい。

最後にもう1つ。漕艇部は、ボート普及と地域貢献のためのレクリエーションボート大会を主催している。本年度は11月8日に、茨城県土浦市桜川で「第40回水郷土

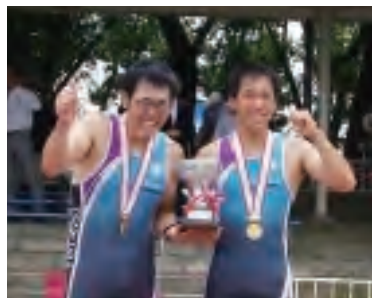




浦・筑波レガッタ」開催した。競技用ボートでなく、安定性のあるボートを使い、舵は部員が取るので経験は不要、参加者は4人1組で申し込む。申し込み不要の試乗会もある。ボートの魅力を理解するには体験するのが一番。今回は、ぜひ参加してみはてはいかがだろう。

※ダブルスカルとは、両手で1本ずつオールを持つ種目(スカル)の2人漕ぎ。シングルスカルは1人漕ぎ。他に、両手で1本のオールを持つ種目(スウィープ)があり、1人漕ぎから8人漕ぎまで、コックス(舵手)あり・なしとさまざまな種目がある。いずれの種目も、2000mの直線セバレーコースで早さを競う。1つの大会には1人1種目しか出場できない。漕艇部は、本年度のインカレに、シングルスカル、ダブルスカル、舵手付クォドルプル(スカル、4人漕ぎ+コックス)で出場。

※日本人による初めてのボート競技は、1883年の、大学の前身・体操伝習所と東京大学の学生による対抗レース



内藤草太選手(左)と越智寛太選手



小原有賀選手



Information

前身の師範学校から140年を超える歴史を有し、オリンピックの金メダリストを始め、優秀な選手を多数輩出している本学の体育会。主な競技成績および今後の試合日程を紹介しますので、ぜひ、各フィールドに足を運び、熱き声援を送ってください。

【つくばスポーツ ONLINE】<http://www.sports.tsukuba.ac.jp/>

【筑波大学体育会】<http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~taikukai/>

漕艇部

第69回国民体育大会

【成年男子ダブルスカル】優勝 越智寛太(体専3 愛媛選抜)

【成年女子舵手付クォドルプル】優勝 木村光里(体専2 愛媛選抜)小原有賀(体専1 同)

体操競技部

豊田国際体操2014

【段違い平行棒】優勝 井上和佳奈(体専1)

第32回DTBカップ(チームチャレンジ)

【男子団体】優勝 星野力維(体専2)

バドミントン部

第65回全日本学生バドミントン選手権大会

【女子団体】優勝 (8年ぶり3度目)

水泳部

第56回日本選手権(25m)水泳競技大会

【女子50m背泳ぎ】優勝 諸貴瑛美(体専4)

【女子50m平泳ぎ】優勝 小林明日香(体専4)

剣道部

第62回全日本剣道選手権大会

優勝 竹ノ内佑也(体専3)(史上最年少、43年ぶりの学生王者)

オリエンテーリング部

第7回全日本スプリントオリエンテーリング大会

【W20A】優勝 鈴木直美(地球1)

2014年度日本学生オリエンテーリング選手権大会(ロングディスタンス競技)

【女子学生新人クラス】優勝 鈴木直美(地球1)

第41回全日本オリエンテーリング大会

3/29 福島県二本松市

卓球部

第69回国民体育大会

【成年女子】優勝 野中由紀(人間総合 体育2 長崎選抜)

平成26年度全日本卓球選手権大会

1/13~18 東京体育館

TOKYO OPEN 2015 第67回東京卓球選手権大会

3/11~15 東京体育館

バスケットボール部

第66回全日本大学バスケットボール選手権大会(男子)優勝(61年ぶり2回目)

【最優秀選手賞】笹山貴哉(体専4)

【優秀選手賞】坂東拓(体専4) 杉浦佑成(体専1)

柔道部

グランドスラム・東京大会

【男子81kg級】優勝 永瀬貴規(体専3)

アジア・ジュニア選手権

【男子60 kg級】優勝 田中崇晃(体専2)

グランドスラム・パリ大会

2/7、8 フランス・パリ

グランプリ・デュッセルドルフ大会

2/21、22 ドイツ・デュッセルドルフ

体操部

全日本ラート競技選手権2014

【女子総合】【跳躍】優勝 松浦佑希(体専4)

陸上競技部

第18回日本学生ハーフマラソン選手権大会

3/1 東京・立川市

第9回日本学生20km競歩選手権大会

3/15 東京・立川市



プレゼン力向上を追求する大学院生中心の学生団体

今や雙峰祭の名物企画となった「学生プレゼンバトル」。そのプレゼンテーション(プレゼン)の質の高さは学内で知れわたり、決勝戦出場者には尊敬のまなざしが向けられる。「1日に何回も知らない学生から声を掛けられた」と伊藤敏さん(人文社会科学部 歴史・人類学専攻 一貫制博士3年)。予想以上の周囲の反響に驚いたという。

主催するつくば院生ネットワーク(TGN)は、「総合大学の強みを生かして、異分野の学術的な交流を促進すること」を目的とした学生団体。2010年に設立し、2011年の雙峰祭で「第1回院生プレゼンバトル」を開催。翌年には「教員プレゼンバトル」を開始し、続いて「プレゼンひろば」、「駅前キャンパス」と、次々に新しい企画を立ち上げている。現在、メンバーは大学院生約20人と学群生1人だ。

学生プレゼンバトル

「院生プレゼンバトル」は、本学の大学院生が、自らの取り組んでいる研究の魅力を分かりやすく伝えるスキルを競う企画だった。その狙いは、大学院生のプレゼンスキルの向上と、異分野コミュニケーションの推進だ。

4回目となる本年度のテーマは、「ラフアカデミック」。「ラフは、笑顔のラフと気軽さのラフをかけて、より気軽に、より研究を楽しく感じてもらうことを目指しました」と、担当の藤野未来さん(教育研究科 教科教育専攻 修士1年)。タイトルを「学生プレゼンバトル」と改め、参加資格を学群生と他大学にも広げた。

本年度の応募者は13人。そのうち3人が学群生で、1人が放送大学の学生。予選会で上位3人を選び、本戦で3人の順位を決定した。予選会も本戦も

審査員は会場に来た観客全員で、本戦には、例年200人くらいが来場する。そのうち半分ほどは、普段学問に接する機会が少ない一般の方々だ。

来場者からは「どのプレゼンも飽きなかった」という感想が多く寄せられた。「たまにユーモアを入れないと、観客に飽きたなぁと思われる。エンターテインメント的な工夫が求められるところが、専門分野の研究者向けにプレゼンする時と全く違うところ」と、共同代表の一人松原悠さん(人間総合科学研究科 教育学専攻 博士前期2年)。誰も飽きないことこそ、成功の証なのだ。



学生プレゼンバトル

Information

筑波大学には、約40の文化系サークルが所属する「文化系サークル連合会(文サ連)」と、約30の芸術系サークルが所属する「芸術系サークル連合会(芸サ連)」という、大学公認の学生組織があります。このコーナーでは、こうした文化系・芸術系サークルによる公演や、学園祭などのイベント情報、各種表彰・コンテスト結果などをお知らせします。(詳細は下記ホームページをご参照ください)

【文化系サークル連合会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~bunsa/>
【芸術系サークル連合会】 <http://www.stb.tsukuba.ac.jp/~geisa/>

落語研究会

お笑い科学万博'15 ～創立40周年記念ライブ～
1/17(場所/ノバホール・小ホール)
13:30開演 入場無料

応援部 WINS

第3回桐華祭(WINS単独公演)
1/23(場所/つくばカピオホール)
19:00開演 入場無料



教員プレゼンバトル



駅前キャンパス

教員プレゼンバトル

「教員プレゼンバトル」とは、教員がプレゼンを競うものではなく、教員にそれぞれの研究を、異分野の人にも分かりやすくプレゼンしてもらい、プレゼンの技術を経験的に学ぼうという主旨の大学院共通科目の授業。永田恭介学長と野村港二教授（教育イニシアティブ機構）が担当教員で、TGNメンバーが、TF（ティーチング・フェロー）としてコーディネートしている。メンバーは、なるべく多くの異分野の先生のプレゼンを見せたいと奔走し、本年度は、多様な分野の教員20人にご登壇いただいた。

プレゼン後には、教員に工夫した点やプレゼン手法を解説してもらう「種明かしディスカッション」の時間もあり、本学大学院生のプレゼン技術向上に貢献している。

駅前キャンパス

「駅前キャンパス」は昨年度に始まった一番新しい企画。「科学の街・つくばで行われている研究を広く一般の方々に知ってもらいたい」と大学を飛び出し、つくば市の科学技術振興課やTXつくば駅の協力を得て、つくば駅改札口前のスペースでの公開・参加型研究プレゼンに踏み切った。観覧無料、予約不要で、気軽にプレゼンに耳を傾けることができる。

教員や学生でない一般の方に、どうやったら自分たちの学問や研究の魅力を伝えることができるか。「学生プレゼンバトル」より一層チャレンジングな試みだ。本年度は8月の第1～第4土曜に開催し、学内の院生・学生団体に加え、

産業総合研究所、気象研究所、宇宙航空研究開発機構の研究者もプレゼンターに招いた。多い時には40人を越す観客が集まり、後方は立ち見でぎっしり覆われるくらい盛況だったという。

こうしたTGNの活動に対し、「課外活動で、学業以外にも顕著な活動をしている」として、本学からTGN共同代表それぞれに副学長表彰が贈られた。

「今の活動を継続していくというより、柔軟な発想で発展させていきたい」と、もう一人の共同代表 藤田佑樹さん（システム情報工学研究科 知能機能システム専攻 博士後期2年）。「学生プレゼンバトルのすそ野を広げて全国区に」など、TGNのメンバーから、次々に、自分の温めている夢や企画が飛び出した。

プレゼンひろば

より気軽に、日常的にプレゼンしようと発足した「プレゼンひろば」。隔週金曜の18時30分から1時間、中央図書館エントランスで開催している。いろいろな研究分野の大学院生が15分のプレゼンを行い、発表後は参加者とフリーディスカッションを行う。



プレゼンひろば

管弦楽団

プロムナードコンサート2015

1/22（場所/つくばカピオホール）
19:00開演 入場無料

ギター・マンドリン部

第36回定期演奏会

1/24（場所/つくばカピオホール）
13:00開演 入場無料

筑波能・狂言研究会

平成26年度卒業公演

2/28（場所/ノバホール・小ホール）
13:30開演 入場無料

フォルクローレ愛好会 フォルクローレサークル南

第28回フォルクローレ定期コンサート

2/27（場所/つくばカピオホール）
入場無料

ブロックフレーテ同好会

平成26年度定期演奏会

1/24（場所/アルスホール）
13:30開演 入場無料

ピアノ愛好会

ニューイヤーコンサート

1/24（場所/つくばカピオホール）
18:45開演 入場無料

津軽三味線倶楽部無絃塾

第17回卒業公演

2/1（場所/市民ホールやたべ）
午前の部 10:30開演／午後の部 16:30開演
一般 3000円 学生 1500円



スビニーバブラー



ダフェ



一角サイ



フェワ湖のほとりにあるポカラ

カトマンズは、寒い時で10度、暑い時で30度くらい。ポカラはカトマンズより少し温暖です。6月～8月は雨季なので、ネパールに行くなら空気が澄んでいる秋がいいと思います。花が好きなら春もお勧め。山が「ラリグラス」(しゃくなげの一種・ネパールの国花という真つ赤な花に彩られて、とてもきれいです。

毎日どこかで「祭り」が！

ネパールには60を超える民族がいます。8割以上がヒンズー教徒ですが、仏教徒やイスラム教徒の他、各地の土着信仰を信仰している人がいます。そのためか「ネパールには1年を通して祭りが無い日がない」と言われるくらい数多くの祭りがあります。

ネパールで一番大きくて長い祭りは「ダサイン」(収穫祭)です。「ダサイン」は9月末から10月初めに行われる10日間ほどの祭りで、メインの日は国民的休日になります。みんな帰省するので、カトマンズは人が少なくなります。日本のお正月のようなものですね。本来はヒンズー教の祭りですが、宗教にこだわらず、国全体で祝います。ネパールにはたくさんの宗教がありますが、お互いに尊重し合っていて、宗教の対立はありません。

他に、1日目はカラス、2日目は犬：と5日にわたってブジャ(祈り)をささげる対象が変わる祭り「ティハール」、既婚女性が配偶者のために祈る祭りで、女性たちが歌って踊る「ティーズ」などが有名です。

「タルカリ・ダルバート」

ネパールでは、ほとんど毎日、朝食と夕食に

「タルカリ・ダルバート」を食べます。「タルカリ」はカレー。インドのカレーに比べるとスパイスが控えめで、素材の味を大切にしています。「ダルバート」の「ダル」は豆のスープ、「バート」はお米という意味で、日本のご飯と味噌汁というイメージ。日本の定食メニューのようにそれらと「アチャール」というピクルスに似た漬物が1つのお盆につづいていきます。好みに応じて、「ダル」に、「タルカリ」や「バート」、「アチャール」を混ぜながら食べます。

ダルやタルカリに使う肉や野菜は、日によって変わります。肉は主に鶏肉とラム肉。牛肉は禁止で、豚肉も食べない人が多いです。最近では、若い人々を中心にヨガやメディテーション(瞑想)がはやっていて、それらに関心ある人たちの間で、ベジタリアンが増えていきます。昼食は、チャパティとお茶などで軽く済ませます。

ジャングルサファリとバードウォッチング

ネパールは野生動物の宝庫でもあり、外国人観光客にはジャングルサファリやバードウォッチングのツアーも人気があります。

野鳥は、ヒマラヤ地域にのみ生息する国鳥ダフェ、ネパールにしかないスビニーバブラーなど、カトマンズだけでも500種類以上生息していると言われています。実家の近くに小さい森があるのですが、朝には鳥たちが一斉にさえずり、とても気持ちがいいです。

世界自然遺産であるチトワン国立公園には、ベンガルタイガーや一角サイなどの絶滅の危機にひんしている動物がいます。ここでは、象の背にのってジャングルに分け入るサファリを楽しむことができますよ。



サガルマタ(エベレスト)



「ティハール」3日目は牛、5日目は兄弟に祈りをささげる

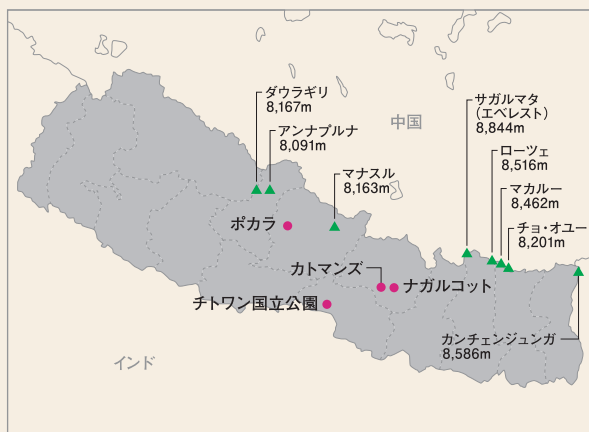


ティーズ祭り



Homeland

本学には、100を超える国から、約3千人の留学生が訪れています。
このコーナーでは、本学の留学生から、出身国の自慢の場所や風景、食べ物など、多岐にわたって紹介していただきます。



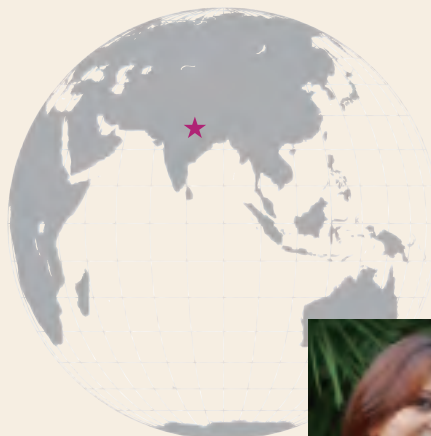
ネパール
連邦民主共和国



バヌ ヤシン

Banu Yasin さん

所属: 生命環境科学研究科 持続環境学専攻 博士後期1年
趣味: 読書、映画鑑賞、旅行、料理



20年で劇的に変化した首都カトマンズ

私は首都カトマンズで生まれ育ち、カトマンズ・モデル大学を卒業した後、日本に来ました。カトマンズはこの20年で信じられないくらい変わりました。子どもの頃は田んぼばかりののんびりしたところでしたが、今では、にぎやかなビル街になっています。

寺院もたくさんあり、「カトマンズ盆地」としてユネスコ世界文化遺産に登録されています。ネパール最大のヒンズー教の寺院「バシユパティナート」や仏教において重要な寺院「スワヤンブナート」など、世界遺産の寺院や史跡が7つあり、大勢の参拝者や観光客が訪れます。カトマンズは「ヒマラヤの玄関口」としても有名ですね。登山者たちはここで装備をそろえたり山岳ガイドの手配をしたりして、飛行機や車でヒマラヤに向かいます。

ネパールの広さは、北海道の2倍よりちょっと小さいくらい。そのうちの15%が、海拔4000mから8848mまで広がる上部ヒマラヤで、世界に14座ある8000mを超える山のうち8座があります。私はその辺りにまだ行ったことがありませんが、カトマンズの近くからでもヒマラヤ山脈の素晴らしい景色を楽しむことができますよ。

何度行っても感動するのはカトマンズから35kmのところにある高原、ナガルコット。東にサガルマタ(エベレスト)、西はアンナプルナ山脈まで200kmにわたって連なる雄大なヒマラヤ山脈からのサンライズはとても素晴らしいです。

他に好きなところといえば、フェウ湖のほとりにあるポカラです。ここは湖と山のコントラストが素晴らしい。手漕ぎボートに乗って楽しんで思い出があります。



ラリグラス



スワヤンブナート



祭りのお供え サマルバジ



タルカリ・ダルバート



カトマンズ盆地で一番高い、高さ30mのニャタポラ寺院



地域貢献



「鯨と海の科学館」収蔵品レスキュー活動

岩手県山田町の「鯨と海の科学館」は、東日本大震災で大きな津波被害を受けました。世界最大級のマッコウクジラの骨格標本をはじめ、鯨漁に使われた漁具や、捕鯨の歴史を記録した写真など、貴重な展示物のほとんどが海水や泥などにさらされました。科学館の再開に向けて、それらの展示物を洗浄・乾燥して元の姿に戻す活動が、松井敏也准教授（芸術系）率いるレスキューチームにより続けられています。文化庁の被災ミュージアム再興事業の一環として、昨年9月に引き続き、11月25日から30日まで、2度目の活動が行われました。今回は、芸術

専門学群や生命環境科学研究科の学生など、総勢13名が参加しました。

科学館自体も復旧工事中のため、レスキュー作業は館の裏手に建てられたプレハブの仮設収蔵庫で行います。冬の寒さが募中、一つ一つ丁寧にホコリや砂などの汚れを落とし、分類をして乾燥させます。流失してしまった収蔵物もあり、残った資料のリストを作り直すことも重要な作業です。津波によるダメージを受けた文化財のレスキューは過去に例がなく、修復・保存の方法論の研究も兼ねて、作業を進めています。大きな博物館に保管されたいわゆる芸術的な価値のある文化

財ではなく、地域の人々が生活の記憶とともに大切に残してきたモノたち。科学館のスタッフや関係者の方々と一緒に、収蔵品に対する思いや歴史を聞きながら、実際にそれらに触れて作業をするのは、学生にとっても貴重な経験です。被災地の役に立ちたいという彼らの思いも、町の人々に伝わっているようです。

「鯨と海の科学館」は、自然豊かな公園や海水浴場などに囲まれた中に立地し、町民の憩いの場として利用されていましたが、それら周辺の施設は津波にすっかり流されてしまいました。つい最近まで、町中のがれきが数メートルの高さにまで積み上げられていた敷地は、ようやくその処理が終わり、科学館の復旧も本格的になってきました。それでも今回の活動までにレスキューできたのは全体の4分の1程度。まだ数百点の資料が助けを待っています。次の活動予定はまだ決まっていませんが、松井准教授は「とにかく最後までやり通したい。興味のある人は誰でも参加歓迎です」と意気込みを語ります。

町のシンボルとして、再び多くの子どもたちが訪れる科学館をつくることは、山田町全体の希望でもあります。館長の湊敏さんは、「本当に心強く、頼りに思っています。保存方法などもアドバイスを受けながら、今年夏の再開を目指したい」と、このレスキュー活動への期待を話してくれました。





TOPICS

科学の魅力を子どもたちへ！ つくばサイエンスコロボ2014

昨年11月8日、9日に、「つくばサイエンスコロボ2014～科学と環境のフェスティバル～」をつくばカピオおよび大清水公園にて開催しました。このイベントは、つくば市と筑波大学が事務局を務めるつくば3Eフォーラム※が主催し、子どもから大人まで、多くの市民が最先端科学に親しむ機会を提供するものです。

3Eフォーラムエリアでは、最先端のエネルギーに関する展示や体験を中心に実施しました。石田政義研究室のブース「燃料電池を組み立ててみよう」では、次世代エネルギーとして注目されている水素と空気中の酸素で発電する燃料電池づくりに挑戦してもらいました。研究室の学生のサポートにより、参加者は5分ぐらいで燃料電池を組み立て、ライトや羽を使って、実際に発電する様子を確認しました(写真①)。また、渡邊信研究室の「藻類プールで藻類すくい?!」ブースでは、「藻類」を育てるプールから実際にポイで水をすくい、顕微鏡で観察してもらいました。すくった



時はただの緑色の水で、肉眼では何も見えなかった藻類が、顕微鏡越しにさまざまな形で見え、オイルを作る

藻類を見つけると、子どもたちは感激していました(写真②)。

また、「科学フェスティバル」エリアでは、毎年、理科実験が大好評です。面白理科実験・工作隊の「手作りラジオに挑戦!」では、半年以上も電池交換が不要な省エネのイヤホンラジオとアンテナも自作するスピーカー式ラジオの製作に挑戦しました。ポリマー合成研究室の「色・



音・液晶の不思議」では、液晶や静電気センサの作成、クロマトグラフィーやムラサキキャベツの実験などを実施しました。生物学類の「生物ひろば」では、動物、植物、微生物について、研究紹介や実験を通じ、生物の面白さを体験してもらいました(写真③)。

子どもたちはもちろん、保護者の方々も、子どもの頃を思い出し、一緒になって実験や工作に取り組む姿が見られました。「科学の楽しさと大学の魅力を感じてほしい!」というのが各イベントの関係者全員の願いです。世界にはさまざまな不思議があふれています。今回のイベントに参加してくれた子どもたちが、いつの日か科学者になってくれること、また筑波大学に入学してくれることを期待しています。

※つくば3Eフォーラム：筑波研究学園都市の力を結集し、つくばを「環境」「エネルギー」「経済」のバランスがとれた科学都市に構築するための活動を展開するネットワーク。研究学園都市の各機関が連携して地域貢献するためのプラットフォームの役割を担う。

「第8回つくば3Eフォーラム会議」および「サイエンスツアー」開催のお知らせ

2015年1月25日(日)に、つくば市役所にて「つくば3Eフォーラム会議」を開催します。この会議は、つくばにおける温室効果ガス低減に向けた情報提供、活動報告、市民や産業界等との交流の場となるシンポジウムで、今年で8回目となります。今回のテーマは「水素エネルギーの活用」。水素は、利用時にCO₂を排出しないなどの利点から、次世代エネルギーとして世界的に注目され

ています。つくばの研究技術開発を結集して、水素エネルギー社会を後押しすることができないか方策を考えていきます。

また、前日の1月24日(土)には、実際に水素エネルギー開発現場などを訪問するサイエンスツアーも開催します。どなたでも参加できるツアー(定員制)です。あなたも、次世代エネルギーに関する最先端研究に触れてみませんか？

詳細は「つくば3Eフォーラム」ホームページ参照 <http://eeeforum.sec.tsukuba.ac.jp/>



学長表敬続々！

この秋も本学のスポーツ選手たちが大活躍し、優勝旗を持った誇らしげな選手たちが、続々と学長室へ報告に訪れました。史上最年少で剣道日本一に輝いた竹ノ内佑也選手。第41回全日本大学選手権大会男子ダブルスカル優勝および

2014アジアジュニア選手権大会女子ダブルスカル優勝の漕艇部。第83回日本学生陸上競技対校選手権大会で、6年連続24回目の総合優勝をした陸上競技部女子。第65回全日本学生バドミントン選手権大会優勝のバドミントン部女子。

第66回全日本大学バスケットボール選手権大会優勝の男子バスケットボール部。学長や副学長は、選手一人一人に、ねぎらいと今後の活躍を期待する言葉をかけました。

全日本剣道選手権で竹ノ内佑也選手が史上最年少優勝！

剣道日本一を決める第62回全日本剣道選手権大会で、本学の竹ノ内佑也選手(体育専門学群3年)が初出場で初優勝を果たしました。21歳5ヶ月での優勝は史上最年少で、大学生の優勝も43年ぶりという快挙です。

決勝戦では、國友鍊太郎四段(福岡県警)に1本も奪われることなく、得意の面を2本決めました。



男子バスケットボール部念願のインカレ優勝！

第66回全日本大学バスケットボール選手権大会で、男子バスケットボール部が、筑波大学開学以来初の優勝を果たしました(前身の東京教育大学時代を含めると61年ぶり2度目)。なお、最優秀選手賞にはキャプテンの笹山貴哉選手(体育専門学群4年)、優秀選手賞には坂東拓選手(同4年)、杉浦佑成選手(同1年)が選ばれました。



写真提供: O.TAKEDA



写真提供: O.TAKEDA

モニュメント除幕式を挙行

茨城県信用組合会長の幡谷祐一さんが寄贈したモニュメントの除幕式が昨年10月7日に行われ、永田恭介学長らが出席しました。



この除幕式は、2010年に全国最高齢で生命環境科学研究科博士課程を

修了し、博士(学術)を取得された幡谷さんから、本学学生への激励と本学に対する大きな期待を込め、モニュメントが寄贈されたことに伴い行われたものです。

モニュメントは、柴田良貴教授(芸術系)作のブロンズ像「旅へ」と「夜の幕をひらく」および幡谷さん作の漢詩を刻んだ銘板。銘板の書は中村伸夫教授(芸術系)によるものです。



このモニュメントは、本学のアカデミックシンボルの一つとして、学問に宿る崇高なる精神性と高揚感を与えるものになると期待されます。

「本学と産業技術総合研究所との合わせ技ファンド」設立

本学と産業技術総合研究所は、互いの予算を持ち寄り、公募した共同研究に資金提供する「産総研と筑波大との合わせ技ファンド」を立ち上げました。独創的な研究シーズ発掘からイノベーション創出につなげる多数の共同研究が生まれ、筑波研究学園都市における教育・

研究・地域活性化の促進に寄与することを目指しています。

第一弾では、67課題の応募があった中から、数理工質系3課題、システム情報系から2課題、医学医療系から2課題、生命環境系から2課題の計9課題が採択されました。それぞれの機関が1000

万円ずつ供出、1件あたり222万円を支給します。

三明康郎副学長は、「大学の基礎研究と産総研の最先端の技術を組み合わせることで大きな展開ができる。非常に多くの提案があり力強く思っている」と語りました。

実は強い母校愛？

〈筑波大学イメージ調査〉



3回目となる「筑波大学イメージ調査」のレポート。今回は「筑波大学に今後期待すること」に関して読み込んでみようと思う。

在学生、教職員、父母、卒業生、外部の5つのグループに「今後の筑波大学に期待する事柄」を20項目からあげていただいた。

当然のように「専門性の高い教育」、「研究力の高さ」、「産業界など社会と連携」などに大きな期待が寄せられている。

父母のグループは「就職支援・キャリア教育」の項目が平均値より抜き出て高く、親の願望はやはり子供の将来なのかと妙に納得できたりする結果が見える。

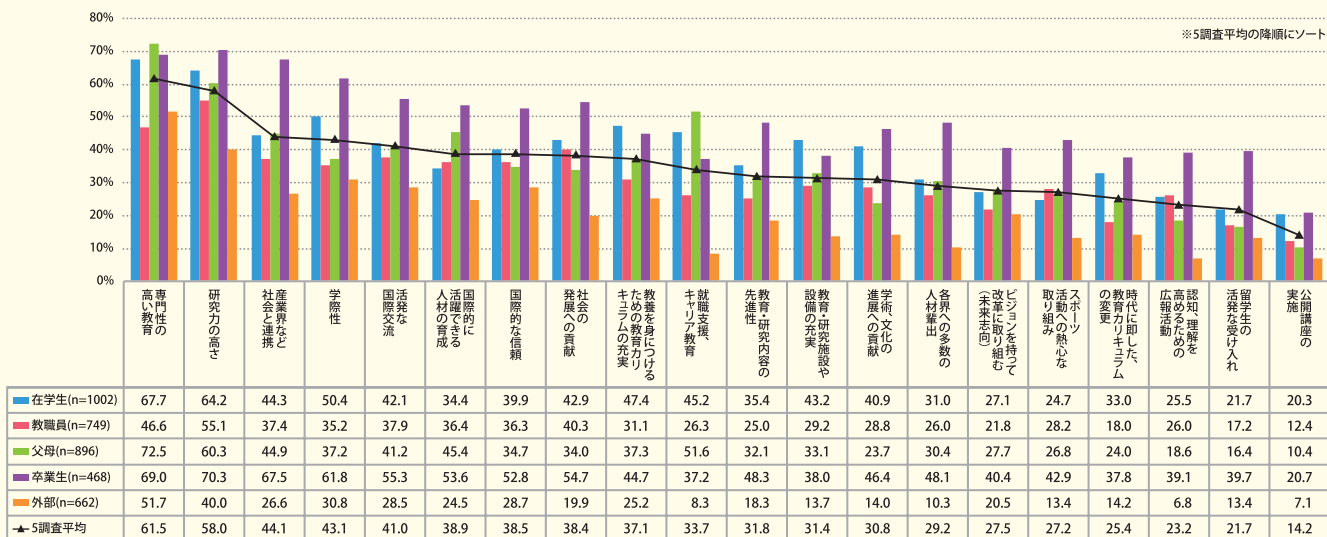
さらに読み込んでいくと特筆すべきことに気がついた。卒業生のグループは全項目にわたり平均値よりも期待が大きく上回っているのだ。どんな項目であれ、卒業生は母校である筑波大学に大きな期待を寄せているのがはっきり分かる。

卒業生のネットワークが弱いという声も聞く筑波大学であるが、それぞれは母校に強い愛情を感じていると読むことはできないだろうか？ただそれが組織的になっていなかったり、表わす場が見いだせなかったりするような気もする。

2013年には卒業生の企業経営者の会“筑波みらいの会”が組織された。大学WEBページでは各界で活躍する卒業生を紹介するTSUKUBA ALUMINIもスタート。卒業生が社会の中でさまざまなポジションを築きあげるのには開学以来40年以上の時間を必要としたのだろう。

SNS上には学類や研究科の卒業生・在学生コミュニティもあちこちで見かける。卒業生の力を大学経営に生かしていくのにそろそろ期は熟してきたのかもしれない。

客員教授・広報室コンサルタント 亀谷 賢



「筑波大学ブランド調査 調査結果サマリー」(日経BPコンサルティング)P.7から一部省略して転載

受賞 Awards and Prizes

ジェームズ ダイソン アワード 2014 国際準優秀賞を受賞

システム情報工科学研究科 知能機能システム専攻 博士前期2年の江口洋丞さんと芸術専門学群4年の清谷勇亮さんが、次世代のデザインエンジニアの支援・育成を目的に毎年開催される国際デザインアワード「ジェームズ ダイソン アワード 2014」で国際準優秀賞(日本最優秀賞)を受賞しました。

ジェームズ ダイソン アワードは日常の問題を解決する様々なアイデアをテーマにした作品に対して贈られる賞です。今回受賞したのは、「QOLO (Quality of life with locomotion)」(写真左)という立ち乗りができる電動車いすで、椅子やベッドから立ち上がる動作を支援し、立ったまま体の重心位置の変化を検知

して移動することができるシステムです。日常生活では、料理や買い物など立った姿勢で行う行動がたくさんあり、設備もその高さを前提に作られています。車いすを利用する人々は、その高さによって、ごくありふれた行動までもが制約を受けるのです。健康者と同じ高さの目線で過ごすことは、キッチンや書棚などが普通に使えるだけでなく、コミュニケーションの点でも敷居を取り除きます。



表賞式にて。江口洋丞さん(左)と清谷勇亮さん

QOLOは、ロボット工学と工業デザインという2つの分野が協働することで開発できた作品。本学ならではの異分野融合がもたらした成果です。

主な受賞等一覧

受賞名	受賞者(所属・学年)	指導・研究室
日本体育学会第65回大会 若手研究大会委員長賞 若手研究優秀賞	図子浩二教授(体育系)	_____
	苅山靖特任助教(体育系)	
2014年度計測自動制御学会フェロー	山海嘉之教授(システム情報系 サイバニクス研究センター長)	_____
Gachon Pride Alumni 表彰	金俊達助教(生命環境系 生命領域学際研究センター)	_____
日本陸水学会国際交流奨励賞	荒居博之非常勤研究員(生命環境系)	_____
Best Paper Award at Workshop on Smart Technology for Cooking and Eating Activities (CEA2014) in conjunction with the 2014 ACM International Joint Conference on Pervasive and Ubiquitous Computing (UbiComp 2014)	関洋平助教(図書館情報メディア系)	_____
日本学術振興会平成25年度特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員の表彰	鈴木博章教授(数理物質系)	_____
The 6th International Conference on Recent Progress in Graphene Research (RPGR2014) Best poster award	郭東輝博士研究員(数理物質系)	_____
第3回「明日の象徴」医師部門	吉本尚講師(医学医療系)	_____
平成26年度日本デザイン学会年間論文	山本早里准教授(芸術系) 工藤真生研究員(システム情報系)	_____
日本感性工学会 論文賞・技術研究賞・事例研究賞	山田博之助教(芸術系)	_____
日本学術振興会科学研究費補助金第1段審査表彰	千原浩之教授(数理物質系)	_____
	丸本一弘准教授(数理物質系)	
	宇津呂武仁教授(システム情報系)	
	新城靖准教授(システム情報系)	
	菅谷純子教授(生命環境系)	
	山路恵子准教授(生命環境系)	
1st Runner-Up Theoretical Paper Award	中谷多哉子准教授(ビジネスサイエンス系)	_____
	イリチュ(佐藤) 美佳教授(システム情報系)	

受賞名	受賞者(所属・学年)	指導・研究室
平成26年度「頭脳循環を加速する 戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」採択	征矢英昭教授(体育系)	_____
平成26年度「大学発新産業創出拠点プロジェクト」採択	西川博昭教授(システム情報系)	_____
医学教育等関係業務功労者 文部科学大臣表彰	荒井勝三調理師長(病院総務部)	_____
	菅江則子技術専門官(医学系技術室)	
第3回エヌエフ基金研究開発奨励賞優秀賞	都甲薫助教(数理物質系)	_____
山崎貞一賞	長瀬博教授(国際統合睡眠医学科学研究機構[WPI-IHS])	_____
第18回日本心血管内分泌代謝学会学術総会 若手研究奨励賞	山城義人助教(生命領域学際研究センター)	_____
第11回塑性加工国際会議 Best Paper Award	荒井裕彦教授(連携大学院・産業技術総合研究所)	_____
	杉田栄彦(システム情報工学研究科 知能機能システム専攻 博士後期3年)	
日本混相流学会 混相流シンポジウム2014 学生優秀講演賞	合田篤 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期1年)	阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子准教授(システム情報系) 金川哲也助教(システム情報系)
	綿引壮真 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期1年)	松本聡教授(連携大学院) 阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子准教授(システム情報系)
Chirality 2014 Best Poster Award	川島裕嗣(数理物質研究科 物性・分子工学専攻 博士後期3年)	後藤博正准教授(数理物質系)
日本体育学会第65回大会組織委員会企画 「若手研究発表賞」大会委員長賞	吉田拓矢(人間総合科学研究科 コーティング学専攻 3年制博士2年)	_____
日本化学会欧文誌 BCSJ賞	真弓夕佳(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期 2010年修了)	市川淳士教授(数理物質系)
	相原大路(数理物質科学研究科 化学専攻 博士前期 2014年修了)	
9th International Symposium on Two-Phase Systems for Ground and Space Applications (ITTW2014) Second Place	綿引壮真 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期1年)	松本聡教授(連携大学院) 阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子准教授(システム情報系) 金川哲也助教(システム情報系)
第4回性の健康医学財団賞	須賀朋子 (人間総合科学研究科 ヒューマン・ケア科学専攻 3年制博士3年)	森田展彰准教授(医学医療系)
第63回高分子討論会 優秀ポスター賞	櫛田創(数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士前期1年)	_____
第4回CSJ 化学フェスタ2014 ポスター賞	林宏紀(数理物質科学研究科 物性・分子工学専攻 博士前期1年)	後藤博正准教授(数理物質系)
日本磁気科学会第9回年会 研究奨励賞		
第5回若手交流発表会 (NTHAS5) Best Poster Award	齋藤慎平 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期1年)	阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子准教授(システム情報系) 金川哲也助教(システム情報系)
日本マイクログラフィティ応用学会第28回学術講演会 毛利ポスターセッション 最優秀賞	綿引壮真 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期1年)	松本聡教授(連携大学院) 阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子准教授(システム情報系)
〃 優秀賞	合田篤 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期1年)	阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子准教授(システム情報系) 金川哲也助教(システム情報系)
	田崎倫之 (システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 博士前期1年)	松本聡教授(連携大学院) 阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子准教授(システム情報系)
	丹羽基能(理工学群工学システム学類4年)	阿部豊教授(システム情報系) 金子暁子准教授(システム情報系) 金川哲也助教(システム情報系)
情報処理学会 IFATヤングリサーチー優秀賞	堂前友貴 (図書館情報メディア研究科 図書館情報メディア専攻 博士前期 2014年修了)	関洋平助教(図書館情報メディア系)

※所属、職名、学年は受賞時

システム情報工学等技術室
雨谷恵さん

その昔、青年海外協力隊で派遣されたブルガリアでは養蜂が盛んで、沢山の種類のハチミツが市場で売られていました。新鮮なハチミツはとても美味しくて、コーヒーと一緒に頂くのが現地流でした。ミツバチと私は不思議な縁があるようで、去年我が家にミツバチの巣箱がやって来ました。軽い気持ちで夫婦で養蜂を始めたのですが、ミツバチを通じて季節の移り変わりを感じ、また、環境問題に気をつけるようになりました。週末はミツバチが中心の生活ですが、今はハチミツをとるより、ミツバチのお世話の方が楽しいくらいです。



今回は、医学医療系助教の堤円香さんです。
「同じ街に住む夫婦共通の友人です。仕事と子育てと社会貢献活動と、とっても活発な女性です」

医学系技術室
菅江則子さん

以前からブラウスやスカーフを草木染めして楽しんでいました。ある日、立ち読みをしていた本の中に機織りの記事があり、いつか自分も機を織って衣類を作りたいと思いつめてしまいました。綿を栽培するところからはじめ、糸を紡ぎ、染色して機織りを実行してしまったのが10年前だったでしょうか。初めて出来上がった布は2メートル弱、折り目も不揃いで布と呼ぶにはほど遠いものでした。今は週末になると自分で紡いだ糸で機織りをし、出来上がった布を使ってベストや袋物等を作っています。今は木綿の布ですが絹織物も織ってみたいので、蚕を育ててみようと妄想は広がる一方です。



今回は、医学医療系准教授の鈴木英雄さんです。
「医学教育企画評価室でフットワークよく様々な難題を解決してくださっています」

リ シ ー イ ッ セ イ

>>>

数理物質エリア支援室
富岡有子さん

8年ほど前から趣味で写真の勉強を始め、時々個展やグループ展を開いています。以前は撮影のために旅行に出かけて、山や溪谷で四季の風景を撮影したり、朝日や夕日の撮影をしたりすることが多かったのですが、最近はちょっとしたお出かけや旅行の際にカメラを持って出かけたり、家の中でお料理やお酒を撮影したりして、日々の生活の中で写真を楽しむことが多くなりました。きれいな景色やかわいいもの、おいしいものを撮るのは楽しいですね。普段はデジタルカメラで撮影していますが、時にはフィルムカメラで一枚一枚慎重にシャッターを切って、写真を撮始めた頃の初心にかえることを心がけています。



今回は、病院総務部医事課の石塚伸さんです。
「私が20代の頃からお世話になっていますが、全く変わらないですね。その元氣と若さの秘訣は何ですか!？」

ビジネスサイエンス系
准教授
尾崎幸謙さん

母親が琴の先生だったり、いくつか楽器を習ったりで、昔から音楽好きです。高校生のときからクラシックギターにハマっており、大学時代の大半をギターと過ごしました。クラシックギターはメジャーな楽器ではありませんが、テレビや映画のふとした場面で流れています。映画だと「禁じられた遊び」とか「ニューシネマ・パラダイス」が有名ですね。乾いた優しい音色の楽器です。右手の爪で弾くので、少し伸ばす必要があります。そのせいで、授業中に黒板を引っ掻いて嫌な音を出すこともしばしばです…。



今回は、人間系教授の安藤智子さんです。
「同じ東京キャンパスの先生で、系は違いますが共同研究をしています」

附属視覚特別支援学校
教諭

宮崎善郎さん

私の趣味はキャンプです。一年を通して自宅のある神奈川県を中心に、静岡県や山梨県へと出かけます。家族や仲間とだ



けでなく、一人でも出かけます。いちばんの楽しみは焚火をしながらの一杯です。ランタンの明かりや焚火の炎を眺めているだけで、心が癒やされます。また、キャンプに出かけられない週末はランタンやストーブのメンテナンスに没頭しています。ボロボロだった数十年前のランタンやストーブがよみがえった時は、なんともいえない気分です。今年も各地へキャンプに出かけるのが目標です。

今回は、人間系准教授の佐島毅さんです。
「児童の実態把握や教材について、いつも分かりやすくご指導いただいています」

生命環境エリア支援室
栗原宏太さん

最近、スポーツデーをきっかけに運動を始めました。主にバレーボールをやっていますが、たまにバスケットボールやソフトバレーボールをやっ



ています。若手職員で週1程度集まって、スポーツデーや職員同士の交流試合、運動不足解消のために練習しています。最初のうちは、一日運動するだけでも酷い筋肉痛に襲われていましたが、最近は楽しんでスポーツをすることができるようになってきました。10数年ぶりに運動をしているので、若いころのようには動けませんが、今後も運動を継続して、体力を付けたいと思っています。

今回は、人文社会系教授の津城寛文さんです。
「担当している学類の先生です。とても気さくな先生で、大変お世話になっています」

TSUKUBA COMMUNICATION

人文社会系教授
黄順姫さん

【筑波大学メンター会の創成する
産学グローバル資本】

筑波大学メンター会活動は全国でも卓越な活動力と組織力を誇っている。80年代アメリカでスタートし世界的に企業や大学で実施されているが、国内では2011年当時9つの大学だけで筑波大学が新しい体制で取り入れた。現在メンター組織は同窓生・グローバル・グローバルメンターの「筑波大学メンター会」、学生の「筑波大学学生メンター会」、および他大学・本学教員の「教員メンター会」がある。活動はグローバルメンターによるアカデミック講演、メンター教員が中心の「グローバル共存・共生」自由科目の開設、学生のアカデミックプレゼン大会に社会人メンターの審査・助言・賞品提供など世界に発信中である。(趣味は、ピアノ、声楽、ゴルフ、水泳)



今回は、教育推進部教育推進課の川面健二さんです。
「特別科目『大学と学問』のコーディネーターの仕事を、教育推進室の温厚・誠実な川面様と一緒にしています」

生命環境エリア支援室
永元美月さん

つくばに移り住んで丸3年が経ちました。スポーツは特にしていませんが、毎日片道4キロの道のりを自転車で全力疾走して程良い運動になっています。寒い日でも職場に着く頃には体が温まります。



お散歩をすること、食べること、写真を撮ることが好きで、休日はしばしばお出かけしています。春～秋にかけては見頃の花を撮りに行ったり、友人たちとハイキングをしに小山を登ったり、冬は雪山をスノーボードで滑り降りたりしています。筑波山には事あるごとに登りたがり、この秋6度目の登頂を果たしました(大げさです笑)。登った後に飲むビールは格別です。また同期などと登りに行きたいと思っています。

今回は、図書館情報エリア支援室の清水友貴子さんです。
「初配属時、隣の課にいた先輩です。年下けどしっかり者! おしゃれでお料理上手の素敵女子で尊敬します」

※所属、職名は2014年12月現在



本学同窓会組織の茗溪会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

[茗溪会とは] 一般社団法人茗溪会(江田昌佑理事長)は、筑波大学同窓会を母体とする社団法人で、1882年に設立されました。同会は、筑波大学およびその前身諸学校(東京教育大学、東京文理科大学、東京高等師範学校、東京農業教育専門学校、東京体育専門学校、図書館情報大学など)の卒業生により組織されており、現在の会員数約5万4千人を越え、その6割以上が筑波大学卒業生となっています。

茗溪会は、毎年、優れた社会貢献活動を行っている個人および団体を「茗溪会賞」として顕彰する事業を行っています。第13回茗溪会賞顕彰式は、昨年11月26日に、筑波大学を会場にして行いました。この度の受賞者は別記の通りです。

受賞団体の1つ、本学学生グループ「Tsukuba for 3.11」は、つくば市内での将来的な大震災等への課題について、東日本大震災にも学びながら、防災活動推進に尽力しています。今回は、同グループの代表に、茗溪会賞顕彰式に出席しての感想を寄せていただきました。

「継続すること」の重みを改めて実感した 茗溪会賞顕彰式

T-ACT企画「Tsukuba for 3.11」 福井俊介 松本一平 上林直人

キャンパスの木々の葉も散り始め、秋も深まった11月26日、筑波大学・大学会館にて第13回茗溪会賞顕彰式が開催されました。多方面で社会貢献活動に尽力されている、合わせて11の団体、個人の方々が顕彰され、私もT-ACT企画「Tsukuba for 3.11」の一員としてお招きいただきました。

私たち「Tsukuba for 3.11」は、東日本大震災の被災地復興・被災者支援のために、筑波大学の学生で組織された団体です。筑波大学の学生支援プログラム「つくばアクションプロジェクト(T-ACT)」の企画の一つとして震災直後に組織されました。「被災者支援・

被災地復興の長期的サポート」という目的の下、「学生の力を効果的に発揮した、震災復興・被災者支援の実現」をコンセプトにした活動を行っています。震災直後は、がれきの撤去作業や避難所訪問といった活動が主体でしたが、震災から3年以上が経過し、被災地のニーズも多様化する中で私たちの活動内容も推移してきました。現在は岩手県陸前高田市、宮城県気仙沼市、福島県いわき市、そして、今もなお500名近くの避難者の方がいらっしゃるここつくば市を拠点に、交流会の開催や地元のお祭りのお手伝いなどさまざまな活動を行っています。

今回、こうした私たちの活動に対して茗溪会賞をいただいたことは、とても名誉あることと光栄に思います。また、顕彰式後に開かれた祝賀会において、他の顕彰された皆様からお話を伺うことができ、私たちとしてもとても励みになりました。



顕彰式会場風景

顕彰された皆様は、自分たちができる社会貢献活動を、誠実に、そして継続的に続けてこられた方々ばかりでした。移り変わりが激しい時代の中で、そういった真心と信念を持って活動し続けることは困難も多く伴うものと思われま。震災から3年以上が経ち、一部では風化も叫ばれている現状の中で、私たちも団体としての活動の意義と目的に立ち返り、これからの道筋を考えていかなければならない転換期を迎えています。今回、社会貢献活動のいわば先輩方のメンタリティの強さに触れたことは、「私たちも負けていられない」と今後への意欲がかき立てられる貴重な経験になりました。

最後に、私たちの活動を評価していただき、また、このような交流の場を設けてくださった茗溪会の方々から心から感謝申し上げます。私たち「Tsukuba for 3.11」は、茗溪会賞の名に恥じないようこれからも活動に邁進していきます。



顕彰記念集合写真

茗溪会賞(社会貢献活動功労者顕彰)受賞者一覧(順不同・敬称略)

団体

被災者を励ますメッセージ入り雑巾の寄贈 作新学院(代表生徒 駒田 祥史)
「地あぶら」で地域の潤滑油になれば NPO法人「バイオライフ」(代表 塩川 富士夫)
おばあちゃんの生家から広がる人の縁 NPO法人「華の幹」(代表 飯塚 洋子)
筑波大学生の力を生かした地域密着型復興支援 T-ACT企画「Tsukuba for 3.11」(代表学生 福井 俊介)
高校生によるラオス学校建設への協力、支援活動 高知市立高知商業高等学校生徒会(代表生徒 細木 優夏)

個人

木製義足を作り続ける職人 菊池 豊
ご当地紙芝居で心の復興後押し 中谷 奈津子
言葉の橋渡し 心を添えて 間屋 正勝
音楽を通じた日本とモンゴルの交流拡大をめざして 阿部 渚
子供達に生きた科学を 芳賀 和夫
地域での一人暮らしの方やお年寄りの見守り活動 藤原 啓乃



「Tsukuba for 3.11」の活動「福島ひまわり里親プロジェクト」



本学の父母会組織である紫峰会からの情報や話題などを読者の皆様へ紹介します。

〔紫峰会とは〕 紫峰会は、筑波大学生の課外活動などを支援するために1977年に設立された学生後援会です。主な事業は課外活動助成事業（援助金の支給など）、学生生活支援事業（緊急貸付金、コピーサービスなど）、広報・普及事業（紫峰会報の発行、UTcollectionの制作・販売など）です。学生の保護者、卒業生とそのご父母の方、教職員など約1万人が入会しています。このコーナーでは、紫峰会が行っている様々な活動を紹介していきます。



卒業式にて、お客さんと賑わう店内

UTshopでの特別販売

UTshopでは通常の営業以外に、入学式・大学説明会・学園祭・卒業式と、年に4回の特別販売（以下、特販）を実施しています。毎回延べ数千人もの方々にご来店いただき、店内は身動きが取れないほどにぎわいます。そのため、普段は壁になっているUTshop横のシャッターを開け、大学会館の外側から直接店内に入れるようにして対応しています。

入学式や卒業式では、新入生や卒業生のご家族の方々が入学記念やお祝い返しとしてUTcollectionを購入されています。また、特

販限定のどらやき「つくどら」は、販売開始数分で完売してしまうほどの人気商品で、レジ待ちの行列が大学会館の外にまで伸びます。

大学説明会では、高校生でも購入しやすいように通常の価格から割引をしておこなっています。先輩の合格体験談などで、「UTcollectionを使用して勉強したら合格した」といったエピソードが紹介されると、その商品が飛ぶように売れることもあります。研究室とのコラボ商品の藻類クリアファイルや結プロジェクト缶バッジなど、筑波大学の研究活動を表現した商品も人気です。

学園祭は、在学生のご家族や卒業生、地

域の方々など、さまざまなお客様にご来店いただける機会ですので、通常の商品に加えて、学内外で行われている取り組みで制作された商品を販売しています。附属大塚特別支援学校の保護者の会である「桐親会」を母体とする知的障がい者のための作業場「工房わかぎり」で作成した草細工や、茨城県の伝統工芸品「結城紬」を使って筑波大学が茨城県などと協力して開発した商品などが評判です。

また、どの特販においても店頭で紫峰会報や筑波大学新聞、Studentsなどの広報誌を設置していますが、これらは好評につき毎回全て在庫がなくなってしまいます。これからも「筑波大学ファン」を一人でも多く増やしていくため、多くの人に立ち寄っていただけるような取り組みを実施していきたいと思っています。



藻類クリアファイルと結プロジェクト缶バッジ

紫峰会での製本作業

私たち現代視覚文化研究会は漫画やアニメを研究するサークルで、「現視研」の愛称で呼ばれています。開学間もない1976年設立と歴史のあるサークルで、近年では会員が最大で100名を超える大所帯となり、執筆・作曲・造形・コスプレといった活動や、学園祭でのライブイベント開催やメイド喫茶運営など、サブカルチャー全般にわたって活動しています。

私たちは年に4回程度、会誌『Celebrate!』を発行しています。この会誌は漫画・小説・イラストなど多岐にわたる内容となっており、会員有

志が原稿を持ち寄って作成しています。会誌の製本は基本的に全て自分たちで行っており、年に3回程度、紫峰会の製本機を使用させていただいております。

製本機は2年前に更新されたもので、それまでの機械では製本後に本文の一部が抜け落ちてしまうなどの欠点がありました。しかし、今の製本機は以前のものと比較して操作が簡単なので作業効率が向上し、接着面に切り込みを入れてから糊を付けられるため接着強度が増し、よりクオリティが高い本を作れるようになりました。製本は多い時で50冊以上も作成するためとても大変な作業ですが、原稿を印刷して持ち込めば容易に冊子を作成することができ、かつ厚み1cmあたりの製本代が10円と非常に安いので、助かっています。

現代視覚文化研究会 郷原 巧(生物資源学類1年)

私は、今回12月に出版した会誌の編集長を務めさせていただきました。思い通りに原稿の印刷が進まなかったりして大変でしたが、本が完成した時、やっと仕事が完成したという達成感がありました。また、本会誌に私の作品を掲載することもできました。初めての外部向けの制作なので、自分の作品が読者の方にどのように受け取られるかという不安もありますが、少しでも多くの人に読んでもらえたら幸いです。



簡易製本機を使った製本作業の様子



現視研製本スタッフ

本学関係の主な新聞掲載・テレビ放送一覧(2014年10月～12月)

新聞記事一覧

	記 事	掲載本学関係者	掲載紙(掲載日)
1	本学発ベンチャー企業サイバーデザインが「作業支援用HAL」を開発	山海嘉之教授(システム情報系 サイバニクス研究センター長)	朝日・産経・日本経済・日刊工業・常陽・日経産業(10.1)読売(10.6)
2	中村眞理子さんが女子大生登山隊、ネパール北西部の末踏峰・マンセイル峰の登頂に成功	中村眞理子(人文4年)	毎日(10.1)
3	蓑田歩助教らは、硫酸性温泉にいる藻類がレアアースを効率よく回収することを見発見	蓑田歩助教(生命環境系)	日経産業(10.2)日本経済(10.4)
4	「科学五輪で、科学の面白さを体験してほしい」と代表選抜試験の問題作製に携わった和田洋教授	和田洋教授(生命環境系) 相馬朱里(生物3年)	教育(10.3)
5	西村健助教、久武幸司教授らのグループはiPS細胞の品質を左右する遺伝子を特定。多様性を獲得するまでに至るさまざまな中間段階の細胞を作ることにも成功	西村健助教(医学医療系) 久武幸司教授(医学医療系)	日本経済・日刊工業(10.3)
6	磯田博子教授らの研究グループは、チュニジアのサハラ砂漠で新しい微生物を発見	磯田博子教授(生命環境系)	日本経済(10.3) 日経産業(10.6)
7	最高齢86歳で博士号を獲得した幅谷祐一さんが、ブロンズ像2体と自作の漢詩を刻んだ銘板を本学に寄贈	幅谷祐一(OB 茨城県信用組合会長)	朝日・産経・産経(10.8) 読売(10.22)
8	世界体操選手権で初代表の井上和佳選手が活躍	井上和佳奈(体専1年)	読売(10.9)東京(10.10)
9	山海嘉之教授が、新しい医療機器産業創出のために官民連合体「サイバニクス・エクセレンス・ジャパン(CEJ)」を2019年度に立ち上げる	山海嘉之教授(システム情報系 サイバニクス研究センター長)	日刊工業(10.16)
10	キャンパス新発見：芸術を取り入れ、心と空間を演出している附属病院	福島紘子助教(医学医療系) 木村浩准教授(芸術系)	日本経済(10.20)
11	県は、県内勤務を条件として修学資金を貸与する本学医学群の地域枠について、対象者の一部を全国に拡大	医学群	茨城(10.23)毎日(10.31) 読売(11.1)
12	藤田晃之教授が県立明野高校でキャリア教育研究会。小林正美准教授が筑西市稲野辺の市立小学校で理科教室開催	藤田晃之教授(人間系) 小林正美准教授(数理工学系)	茨城(10.23)
13	本学は産業技術総合研究所と共同研究に資金提供する「合わせ技ファンド」を設立	永田恭介学長 三明康郎副学長 内田史彦教授(国際産学連携本部)	日本経済(10.24)常陽(10.28) 茨城(10.29)
14	国登録有形文化財の酒蔵で、本学学生7人が現代アート展	國安孝昌教授(芸術系)	茨城(10.30)東京(10.31) 読売(11.2)
15	剣道全日本選手権で竹ノ内佑也選手が史上最年少優勝。学生王者は43年ぶり	竹ノ内佑也(体専3年)	朝日・毎日・読売・日本経済・産経・東京・茨城(11.4)東京(11.5)
16	ImPACT プログラム・マネージャーに聞く③：重介護ゼロを目指す山海嘉之教授	山海嘉之教授(システム情報系 サイバニクス研究センター長)	日刊工業(11.6)
17	子どもたちの不安を和らげるため、陽子線照射室をキャラクターで装飾	附属病院陽子線医学利用研究センター	常陽(11.7)茨城(12.14)
18	町田龍一郎教授ら13カ国・地域の研究チームが、昆虫の出現は4億8000万年前と発表	町田龍一郎教授(生命環境系 菅平高原実験センター)	毎日・読売・日本経済・茨城(11.8)朝日(11.12)
19	大子町と本学が連携・協力協定を結んでいるため、附属駒場高の化学部員15人が、だいが小で実験教室	山田巖(附属駒場高2年)	茨城(11.12)
20	ロボットスーツ「HAL」の作業支援、介護支援の両タイプが国際安全規格認証を取得	山海嘉之教授(システム情報系 サイバニクス研究センター長)	毎日・日本経済・茨城・フジサンケイビジネスアイ・日刊工業(11.13)
21	平成26年度医学教育等関係業務功労者文部科学大臣表彰受賞 菅江則子技術専門官、荒井勝三調理師長	菅江則子技術専門官(医学系技術室) 荒井勝三調理師長(病院総務部医事課)	読売・茨城(11.14)
22	本学とJICA(国際協力機構)筑波はカンボジアのスポーツ教育の支援事業に関する覚書を交わした	中川昭教授(体育系長)	朝日(11.18)
23	第25回「つば賞」授賞式が行われた。宮崎修一教授が受賞	宮崎修一教授(数理工学系) 江崎玲於奈元学長	常陽(11.21)
24	本学と「デンソー」は、藻の一種「ボトリオコッカス」が作る油を原料とするハンドクリーム「moina(モイナ)」を発表	渡邊信特命教授(生命環境系)	読売(11.28)常陽(12.2)
25	茨城論壇：「留学で英語の聞く・話す能力が短期間で上達した」と永田恭介学長	永田恭介学長	茨城(11.29)
26	バスケットボールの全日本大学選手権で、66回連続出場の本学男子が、61大会ぶり2度目の優勝。笹山貴哉主将が最優秀選手に選ばれる	男子バスケットボール部 吉田健司准教授(ヘッドコーチ 体育系) 笹山貴哉(体専4年) 馬場雄大(同1年) 杉浦佑成(同1年)	朝日・読売・茨城(12.1) 常陽(12.3)
27	中田由夫准教授らは、集団指導による減量支援は短期的に大きな効果がある一方、その体重の長期的維持は難しいことが判明したと発表	中田由夫准教授(医学医療系)	日本経済・日経産業(12.5) 常陽(12.9)
28	柔道グランドスラム東京で、男子73kg級で秋本啓之、男子81kg級で永瀬貴規が優勝	秋本啓之(OB 了徳寺学園職) 永瀬貴規(体専3年)	朝日・読売・毎日・産経・東京・日本経済・茨城・常陽(12.7)
29	山田実准教授らが高齢者の転倒リスクの測定システムを開発したと発表	山田実准教授(人間系)	日刊工業(12.10)
30	第34回島津賞に重川秀実教授が選出された	重川秀実教授(数理工学系)	日刊工業・日経産業(12.10)

テレビ放送一覧

	内 容	出演本学関係者	放送局・番組(放送日)
1	本学に設立されたつくば国際スポーツアカデミー(TIAS)とその参加者を紹介		NHK総合 「首都圏ネットワーク」(11.10)
2	1カ月に1冊も本を読まない人が47.5%という現状に、学生の情報探索行動を研究している逸村裕教授がコメント	逸村裕教授(図書館情報メディア系)	NHK総合 「クローズアップ現代」(12.10)

※所属、職名、学年は2014年12月現在

Event calendar

1 january

- 5日(月) 仕事始め
- 14日(水) 学長主催 新春講演会
- 17日(土) 大学入試センター試験(～18日)
- 21日(水) グローバル人材育成の交流ラウンドテーブル
- 25日(日) 第8回つくば3Eフォーラム会議
- 28日(水) Global Commons Café
- 29日(木) 入学試験「大学院(2月期)」(～2/3)

2 february

- 4日(水) 秋ABCモジュール期末試験(11日分繰上げ)
- 6日(金) 秋ABCモジュール期末試験(～12日)
- 12日(木) 秋学期授業終了
2014 BEST FACULTY MEMBER 表彰式
- 14日(土) 「スーパーグローバル大学創成支援」採択事業
キックオフシンポジウム(虎の門ヒルズ森タワー)
(～15日)
- 17日(火) 春季休業(～3/31)
- 18日(水) 合格発表「大学院(2月期)」
- 25日(水) 入学試験「前期/私費/編入(社)」(～26日)
- 26日(木) 第10回AEARUコンピューターサイエンス&
ウェブテクノロジーワークショップ(～27日)

3 march

- 7日(土) 合格発表「前期/私費/編入(社)」
- 12日(木) 入学試験「後期」
- 15日(日) 「科学モニュメント」完成記念式典
- 20日(金) 合格発表「後期」
- 25日(水) 卒業式 大学院学位記授与式



筑波大学
University of Tsukuba